

## 座談会●5 「人間」を価値化する

[2021年8月5日]

五神真 田辺明生 野原慎司 柳幹康 石井剛 中島隆博



EAA Forum 16



**EAA Booklet - 25**

East Asian Academy For New Liberal Arts  
Joint research and education program  
by The University of Tokyo and Peking University

座談会•5 「人間」を価値化する

[2021年8月5日]

五神真 田辺明生 野原慎司 柳幹康 石井剛 中島隆博

EAA

# Contents

駒場の森から新しい学問を

—— EAA 座談会シリーズ巻頭言

石井 剛（東アジア藝文書院副院長）…………… iii

「人間」を価値化する

趣旨説明 中島隆博…………… 3

## 第 I 部

基調講演 社会変革を駆動する大学

——知識集約型社会を支える「価値」の創造 五神 真…………… 7

討 論…………… 25

## 第 II 部

座談会 「人間」を価値化する…………… 41

五神 真+田辺明生+野原慎司+柳 幹康+石井 剛+中島隆博（司会）

発表 1 生の意義としての価値 田辺明生…………… 41

発表 2 経済学と価値 野原慎司…………… 48

発表 3 仏教のコモンズと人間の価値化 柳 幹康…………… 56

発表 4 斉物的平等と「渾沌」のメカニズム

——『莊子』斉物論の近代的解釈から考える 石井 剛…………… 63

総合討論…………… 67

登壇者プロフィール…………… 82

EAA Forum 巻頭言

## 駒場の森から新しい学問を

石井 剛（東アジア藝文書院副院長）

本座談会シリーズのはじまりは、2019年12月9日の「世界人間学宣言」座談会でした。そのアジェンダの全文を引用します。

## 【趣旨説明】

グローバリゼーションは新たな段階を迎えつつある。人・モノ・情報のボーダーレスな移動によって生じたさまざまなコンフリクトは、人類が近代に達成したさまざまな価値や制度に揺さぶりをかけている。これに拍車をかけるのは、第四次産業革命とも言われる新たなテクノロジー社会の到来であり、気候変動を核心とする人類と地球生態系のサステナビリティの危機であり、医療・生命技術の発展がもたらした生命のボーダーレス化である。

いったい、わたしたちがいま生き、これから向かおうとしている世界はどのようなすがたをしているのだろうか。これまでそうだと思っていた世界の分節が機能不全を呈しつつある時、わたしたちはもう一度、わたしたちが生きる「世界」そのものを問い直し、新たな「世界」像を構築するための想像力を開放する必要がある。そのことは同時に、「人間」に対する再定義をも迫っている。現在の人間は、自然とのつながりだけでなく、機械や情報ネットワークなどの人工物とのつながりのなかではじめて人間たりえている。人種、民族、ジェンダー、階級、個人、健康、生死、環境、技術、制度などなど、人間を構成する諸条件を現代的状況のなかで問い直すことは、新しい世界像を構築することと切り離すことはできないはずだ。

だからこそわたしたちは、人間を問い直しながら世界を想像する新しい学芸（アーツ）を「世界人間学（World Human Studies）」の名で呼びたい。

ここで言う「世界」とは既存の領域を持つ国家や地域の集合体である以上に、わたしたちの認識が及ぶ範囲全体のことを指す。ただしその「世界」は、わたしたちの認識が及ばない何かに支えられていることへの認識も必要であろう。新しい世界の秩序を考えるためには、世界とは何かを、世界の彼方——自然そのもの、また神的・霊的な領域——への視座を含めながら、問い直すことから始めるべきだからだ。また、わたしたちは「人間学」の名において、「新しい人間」を想像し育成する学問と教育のすべてを包含したい。つまり、人文科学、社会科学、自然科学という近代的な諸学の分類に拘泥することのない自由な学芸（アーツ）の理念のもとで行われる研究と人材育成のあり方にこそ、わたしたちは本来の学問のすがたを見出す。

「世界人間学」は新しい学問のフロンティアである。フロンティアは現存する世界の秩序の中心から離れたところに存在するがゆえに、既存の世界秩序の更新を促さずにはおかない。アジアの伝統と西洋の近代を共に経験してきた日本は、フロンティアたるにふさわしい条件を具えている。そして東京大学のフロンティアたる駒場が、世界をリードする新しい学芸（アーツ）としての「世界人間学」をその先端で担い、グローバル・コミュニティに対する責任を果たしていく場であることを、わたしたちはここに希求する。

本座談会は、駒場発の「世界人間学」に向けた展望を開くために企画された。

これは誠に気宇壮大な企てです。では、それは夢でしょうか。荒唐無稽でしょうか。まったくそうではありません。わたしは、「世界」と「人間」を根本から問い直すこと、そして問いを立てる場所としての大学に希望をかけて、それを変革していくことこそが、今日、わたしたちが大学人として取り組むべき、最も現実的、かつ喫緊の課題であると信じています。ジャック・デリダの響みに倣って言うならば、大学の特殊な存在意義は、世界と人間の未来を公言（profess）する人々—— professor の集まりであるということに集約されているのです。わたしはこれを、「人能く道を弘む、道の人を弘むるに非ず」という孔子のことばに結びつけてみたいと思います。「道」とはわたしたちが歩むことによって道になっていくものであり、それが未来に続いているのであり、真理はその道を歩く行為そのものが持つ未来性の中にこそあるものではないでしょうか。その歩みは一人で行われるものではなく、

複数の人々によって行われるべきものです。

この、「世界人間学宣言」座談会を皮切りに、わたしたちは駒場の森で、新しい学問への希望を語る座談会をシリーズ化して開催するようになりました。大がかりなシンポジウムではありません。少人数の、しかし、きわめて濃密な語り合いです。この動きを、「時間をかけて、しかし急いで」育てていきたいと願っています。

なお、上述の趣旨説明はわたしが起草したものの上に、田辺明生さんが手を加えて下さったことにより完成したものであることを最後に書き添えておきます。

2020年6月14日

## New Scholarship from the Forest of Komaba

Ishii Tsuyoshi (EAA Deputy Director)

---

This series of forums from the East Asian Academy commenced with the forum entitled “World Human Studies”, which was hosted on December 9<sup>th</sup> 2019. The initial forum laid out the agenda of this series as follows.

### [Purpose]

Currently, globalization is entering a new phase. Conflicts resulting from the borderless movement of humans, things, and information have created instability in the institutions and values that have defined modernity. Compounding this situation is the arrival of several notable factors: the technological society of the so-called fourth industrial revolution, the crisis of sustainability of human life and the ecological systems of the earth related to climate change, and the blurring of the boundaries that define ‘life’ as a result of developments in medicine and biotechnology.

We find ourselves wondering what shape the world in which we now live, not to mention that of the future, will take. As the ways in which have constructed our image of the world – views that until recently have rarely been questioned – appear to be increasingly dysfunctional, we have to reconsider the world in which we live and open ourselves to the power of imagination in order to create and nurture a new vision of the “world.” At the same time, our current

situation compels us to redefine what is “human.” As human beings in the present, we have become what we are not only through our relationship with nature but also through our relationship with artificial entities such as machines and networks of information. Ethnicity, nationality, gender, class, individuality, health, life and death, environment, technology, and institutions, are all among the conditions that constitute what it is to be human and which then must be reexamined in the contemporary situation. This reevaluation is inseparable from the construction of a new vision of the world.

Therefore, we term the new arts, ones that reexamine what it means to be human while imaging the world, “World Human Studies.” Here “world” not only refers to the totality of existing regions claimed by nation-states and coalitions but it also encompasses all that we as humans can comprehend. However, we must likewise understand that what underlies this “world” is that which lies beyond our imagination. In order to create a new order for our world it is necessary to start by thinking about what the world is from a perspective that incorporates that which is beyond the world (nature *per se*, the fields of divinity and spirituality). In what we call “Human Studies” we desire to draw from all learning and education that can imagine and foster “new human beings.” In this way we seek precisely a scholarship and way of supporting talents that is not limited to modern classifications of disciplines into the humanities, the social sciences, and the natural sciences but is rather based on concept of liberal arts that we find exists in the original practice of scholarship.

“World Human Studies” is a new frontier in scholarship. As a frontier exists at the edges rather than the center of the existing world order, it cannot help but to act in transforming the existing order. In this way, Japan as a country that has experienced both the traditions of Asian and European modernity is uniquely situated on this frontier. We aspire to see Komaba in its role as a frontier of the University of Tokyo help to lead the world in the new arts of “World Human Studies” as a responsi-



ble member of the global community.

The inaugural forum at Komaba was planned as the opening of this new perspective of “World Human Studies”.

This is truly an extraordinary project, and although it may sound like a fantastic dream, we do not see it in this way. I believe that reexamining the “world” and “human beings” as a basis and placing our faith in the university where this investigation is to be carried out – thus initiating a change of the university itself – will be the most realistic and most urgent issue for those of us whose lives are part of the university. Following Jacques Derrida, we might say that the particular significance of the university lies with those who ‘profess’ the future of the world and humanity — namely, the assembly of professors, researchers, and academics. I want to combine this idea with Confucius’s teaching that “it is man who is capable of broadening the way, not the way capable of broadening man”. The “way” becomes what it is precisely because it is our act of walking itself, extending into the future. Furthermore, the truth lies precisely in the futuristic nature of walking along this path. Here, rather than being limited to an individualistic act, “walking” should be an act of humans working together.

Starting with the forum of “World Human Studies,” we, located in the forest of Komaba, have decided to publish a series of forums discussing the vast perspectives offered by this new scholarship. These are not grand symposiums. Instead, they are intimate yet deep conversations. In other words, given the importance of this topic to the changes taking place in the world around us, I hope that the process involving these conversations is an action that “takes its time in a hurry.”

June 14, 2020

# 驹场之森开始的新学问

石井刚（东亚艺文书院副院长）

本座谈会系列始于2019年12月9日的“世界人学宣言”座谈会。其议程全文引用如下：

## 【主旨说明】

全球化正迎来新的阶段。人、物、情报的无边界移动所造成的各种冲突、正在动摇人类在现代达成的各种价值和制度。不仅如此、被称为第四次产业革命的新技术社会的到来、以气候变化为核心的人类与地球生态系的可持续性危机、医疗和生命技术的发展所带来的生命的无边界化、都在加剧这种态势。

我们如今在其中生活的世界、此后将要迈向的世界、究竟会变成什么样子？当迄今为止未加质疑的世界分节不断呈现出机能故障之时、我们有必要再一次重新思考我们身处的“世界”本身、有必要开放构筑新的“世界”图景所需的想象力。同时、这也要求我们对“人类”进行重新定义。当下的人类、不仅是在与自然的关联中、更是在与机器和情报网络等人造物的关联中方才成为人类。种族、民族、性别、阶级、个人、健康、生死、环境、技术、制度等等、在当代的状况中重新考察构成人类的诸多条件、便和构筑新的世界图景密不可分。

正因如此、我们希望将重新考察人类并对世界做出想象的新学艺（arts）称为“世界人学（World Human Studies）”。这里所谓的“世界”、指的不仅是既存领域下的国家和地域的集合体、更是我们认识范围所及的全体。不过、也要认识到、支撑这个“世界”的是我们的认识所不及的事物。为了思考新的世界秩序、就得将对于世界之彼岸（自然本身、神性和灵性的领域）的观察视野包含进来、重新开始思考什么是世界。并且、我们希望以“人学”之名、来

包含一切对“新型人类”做出想象和培育的学问与教育。换言之、正是在不拘泥于人文科学、社会科学、自然科学等现代学科分类、以自由学艺（arts）的理念为前提展开的研究和人才培育方式那里、我们找到了学问的本来样子。

“世界人学”是新学问的前沿。正因前沿处于偏离现有世界秩序之中心的地方、才不能不促使既有的世界秩序产生更新。共同体验了亚洲传统和西洋近代的日本、具备成为前沿的恰当条件。我们衷心期待、驹场作为东京大学的前沿、能率先担当起“世界人学”这一引领世界的新学艺（arts）、成为对全球共同体尽责的所在。

为开启由驹场发起的“世界人学”的前景、特此策划本次座谈会。

### 系列卷首语

这实在是气宇轩宏的计划。那么、这是空想吗？荒唐无稽之事吗？完全不是。我相信、从根本上重新探讨“世界”和“人类”、并寄希望于作为进行探讨之场所的大学、使之发生变革、这在今天是我们作为大学中人应该着手的最具现实意义、最为紧迫的课题。效颦雅克·德里达的话、可以说大学的特殊存在意义、体现于直言（profess）世界与人类之未来的人们——professor（教授）群体那里。我想将这一点和孔子所谓“人能弘道、非道弘人”结合在一起。“道”因我们的行走而成为道、道延续至未来、真理恰恰存在于在道上行走的行为本身所带有的未来性之中、不是吗？这里的行走不是一个人的行为、而应该是复数的人进行的行为。

以这一“世界人学宣言”为开端、我们在驹场之森中决定刊行一系列探讨新学问之希望的座谈会。这些不是隆重的研讨会。而是人数有限却密度很高的互谈。希望这一活动能以“耐心而迫切”的方式发展下去。

2020年6月14日

---

# 「人間」を価値化する

五神 真 (基調講演)

田辺明生 野原慎司 柳 幹康 石井 剛

中島隆博 (司会)

2021年8月5日開催



EAA Forum 16

## 「人間」を価値化する

五神 真 (基調講演)

田辺明生 野原慎司 柳 幹康 石井 剛 中島隆博 (司会)

## 趣旨説明 中島隆博 (EAA 院長)

中島 非常に暑い中、EAA の第 5 回座談会にご参画いただきまして感謝申し上げます。今日は人間の価値化を考える、人間を価値化するという、それなりに刺激的なタイトルで座談会を行います。わたしから少しだけ背景、その趣旨についてご説明申し上げたいと思います。

EAA はダイキン工業さんの支援を受けて進めているプログラムで、ダイキン=東京大学の枠組みの中で、「空気の価値化」というのを追求しています。私は最初に聞いたときに、これはなかなか哲学的な問いだと思いました。つまり、空気という 4 つもしくは 5 つのエレメントのうちの一つを価値化するとはどういうことなんだろう。しかも単なる価値を考えるのではなくて、価値化するというのは、一体どういう事態なんだろう。二重の意味で、この空気を価値化するという事は考えさせられる問いだったわけです。

価値に関して考えてみますと、例えば、われわれは今、資本主義の社会に生きていますが、この資本主義の制度の中では、価値というものは、ほぼ価格に転化されて考えられています。主流派経済学の方に聞いた話では、経済学というものは正面から価値を問うということはしない、と。そうじゃなくて、価格というもので価値を考えるんだ、と。こういうふうに言われました。なるほど、価値に関しては中立的な立場になるわけです。それも一つの考え方だと思います。

しかし、改めて資本主義がいろいろな問題を引き起こしている中で、価値

を考えることが問われるようになりました。しかも、わたしたちは空気を価値化するところまで考えを進めていきたいと思っているわけです。そのときに、私が考えましたのは、やはりモノとコトと人、この三者の関係を一回整理してみたらどうかと思ったわけです。

モノという場合、モノをわれわれが生産して流通させて消費させていく、しかもそれを所有するという形で価値を物に与えていくことがイメージされます。わたしたちはこういう思考法にこれまでなじんできたわけです。しかし、消費が進んでいくとモノは飽和していくわけです。モノを作っても、それが必ずしも売れるわけでもありませんし、所有し続けられるわけでもない。

じゃ、どこに次に向かっていったかということ、今度はコトというものに向かっていくわけです。出来事ですとか、経験といった事柄に価値を見出していく。そういった方向に進んでいったわけです。それは、一見するといつ方向に進んでいるようにも思えるわけです。それこそ「プライスレスな価値」だなんていう標語がありましたけれども、価格に転換できない価値が人間の経験とか出来事にはあると考えるわけです。

ただ、それを資本主義が追求すると何が起きるかということ、やはりパッケージ化された出来事だと思うわけです。それに私たちを巻き込んで、その差異を消費するように仕向けていく。こういった運動が生じてきました。価値というのはそういう差異に与えられた名前になったわけです。

でも、果たしてそれでいいのかということです。そこで改めて人間と価値の関係を考えていかなければいけないのではないのか。特に人間の生が豊かになっていくような方向で価値を考えることはできないか。そういうふうな発想をしていくべきだと思うわけです。空気のようなエレメントも、やはり人間の生を支えていくエレメントだと思うわけです。そこを考え直すということは、改めて人間というのがどのような存在のあり方をしているのか、どのような生のあり方をしているのか、それを問い直すことだろうと思います。

EAA は、ぜひ、そういったものを問い直す場になっていけたらなと思います。それは同時に大学というプラットフォームのあり方、これを考え直すことになると思うわけです。今、価値に関しても、経済的な価値と、社会的な価値というものの接近ということが言われています。大学は、今まで経済

的な価値からすると、周縁的な位置に置かれていたわけですが、しかし、社会的な価値に関して大学が果たしている役割というのは大変大きいと思うわけです。

今、SDGsですとか、ESG投資ですとか、少し経済的価値をめぐる風向きも変わってきているように思います。そういう中で、大学が果たしていく役割、これは大変大きいと思うわけです。どのような社会的な価値を創造することに大学が貢献していくのか。東京大学もグローバル・



中島隆博氏

コモンズのような考え方を掲げることによって、そういったものに貢献しようとしています。五神先生からはその一端をまたお話いただけるものだと思っております。

そのような背景で、今日は人間を価値化するという座談会を組織させていただきました。最初に五神先生から基調講演としてお話を頂戴して、その後、Q&Aに入りたいと思います。では、五神先生にバトンをタッチいたしますので、どうぞよろしく願いいたします。





## 基調講演

## 社会変革を駆動する大学

## 知識集約型社会を支える「価値」の創造

五神 真

**五神** 社会変革を駆動する大学になるということが、2015年に総長になったときにアクションプランとして「東京大学ビジョン2020」を作ったときの中心コンセプトでした。これは、これまで、一教員として東京大学の中で研究室を主宰してきた中で私が感じてきたことに照らし、極めて自然な発想でした。

理系の研究室ですと、マンツーマンで学生を研究指導し、社会に送り出すことになります。修士で出る学生もいれば、卒業論文だけの学生もいれば、博士まで出る学生もあります。私は22年間、工学部の研究室を主宰し、その後2010年からは古巣の理学部の物理学教室に戻りました。これまで私の研究室で関わった卒業生は100人ほどですが、そのうち、70人ぐらいが産業界に行きました。その人たちとは、在学中とにかく何百時間とマンツーマンで付き合いますので、いまでも関係は続いていて、盆暮れに集まるのが定例になっています。今週も土曜日にZoomでOB・OG会をやりますが、そのような形で産業界で働くOB・OGの話聞く中で、どうも彼らの能力が産業界の中で十分活用されていないなと思っていたのです。明らかに、日本の調子がよくないと感じるのです。

それをどうやって変えていこうかというときに、その変革の種をつくるのが大学の役割ではないかと思ったわけです。総長就任当時、理学部に移った際に立ちあげた研究がちょうど順調に走り出したところでしたが、そこを中

断しても今、社会変革にトリガーをかけないと、これまで何万時間もかけて私が学生と共に行ってきた活動が、無駄になってしまうのではないかと思いました。社会変革を駆動すると言いついたきっかけは、ねばねばとしていて、なかなか変革が遅れがちな日本の社会に、何とか新しいきっかけを創りたいと考えたところにあるのです。

総長を6年間やっているうち、特に後半3~4年は海外の方々との連携や、IARU（国際研究型大学連合）の議長としての活動を活発化する中で、この大学が社会を変革するという発想自体が極めてユニークだと言われるようになりました。例えば、スタンフォード大学の学長のもとで、長年経営のサポートをされていた方と会ったときに、彼らには、大学が産業界を変えるという発想はないという話を聞きました。考えてみたら、スタンフォードの周りにはGAF Aがあるわけですから当然なのかもしれません。そういう意味で、この設定はかなりユニークだということがあとから分かりました。

コロナ禍や地球温暖化など様々な世界規模の課題を抱える現代において、大学が社会変革を能動的に進めていくという私達の発想について、「素晴らしい」と言ってくれる海外の方がすごく増えてきたように思います。例えば、カブリ財団の前理事長のコンさんは、私がお話をしたときに、これはすごい、素晴らしいということで、10億円の基金をぽんと出す判断をしてくださいました。グローバルな視点から見ても、大学はそうした新しい役割を担うるわけです。

今、私たちは明らかにパラダイムシフトの最中にあります。私が総長になった2015年は、ちょうど、今のAI技術を牽引しているディープラーニングが様々な場面で大変有効だということがわかり、急速に広まりつつある頃でした。AIを使って何でもかんでもいろんなことができるようになるという雰囲気でした。確かに、例えばこの数年で、AI技術の進歩によって自動翻訳の精度は相当上がっていますよね。このようなことが、広い分野で起きる中で、価値のつくり方、ここでは狭い意味での経済的な価値ですけれども、そこがモノ中心の資本集約型のものからかなり変わってきているということを実感したのです。価値を担う主体がモノから知識や情報、そしてそれを活用したサービスへと転換するのです。これを私達は知識集約型への転換という言い方をして来ました。

そうだとすれば、大学はまさに知、情報、データというものをつくり出し

たり、それらを活用したりする中心になれるので、大学がその経済循環の中でも中心となることはあり得るはずです。精神的なトリガーをかけるだけではなく、大学が新しい経済の主体になりうるのではないか。それは、逆に言えばこの時代の大学の責任かもしれないと考えたわけです。

私の話は2本構成になっています。今日はディスカッションの時間をなるべく取りたいと思うので、資料は私の6年間の思い出してもらおうと、ある程度ピックアップしたのですが、大部になっていますので、適宜割愛しつつ、大事なところを押さえていきたいと思います。



五神 真氏

まず、今、私たちはコロナの最中で大変なことになっています。昨年の3月18日に総長メッセージを出して、コロナでどうなるかは分からないけれども、学事暦は動かさず、とにかく4月1日から大学は新学期を始めますということを宣言しました。それには、デジタルトランスフォーメーションが起こって、リモート講義をはじめ、様々な技術が使えるということが分かっていたということと、コロナ禍がどこまで続くか全く分からない中で先送りしてしまうと、いつスタートするかをどう判断するのが見えないという要因がありました。一番みんなにとってシンプルなのは、いつもどおりやることなので、環境が変わったら環境に合わせて頑張りましょうということを3月18日に決めたのです。

これは、当時としては、ものすごく早い宣言だったと受け取られました。結果的にはその後の対応を進める上でも大変良かったと思っています。つまり、いつ始めるかとか、どこまで待つかというこれまで経験したことのない答えのない問題について、議論することで、学内関係者の時間を費やすのではなく、むしろその分コロナに備えるために知恵を集めることができ、準備もできたのです。

その中で3月中に考えたことの一つに、学生さんたちはちゃんとインターネットにつながる環境にあるのだろうかという懸念がありました。ネット環境が本当に民主的にインクルーシブな状況になっているのかが心配だったのです。インターネットにつながっているといても、スマートフォンの回線だけですべての授業を動画で見ていたら、すぐに通信容量を使い切ってしまう可能性がある。そこで、まず、Wi-Fi ルーターを1,000台ぐらい用意して、必要な学生に配れるように準備しました。

それから、通信環境がどのくらい整備されているのかも未知数でした。今でこそオンライン会議は当たり前になりましたが、当時はまだそれを大規模に行った経験はありませんでした。オンライン講義で何百人も受講する授業が同時並行でいくつもあるというときに、通信回線がパンクしないかが心配で、デジタルコンテンツはアップロードしておいて、学生さんたちが好きなときにダウンロードして勉強してもらうオンデマンド方式を組み合わせる必要があるだろうということを直感したわけです。

そのときに問題になったのが著作権でした。リアルタイムで行うオンライン講義については、著作権法上の特例として許諾が必要でない仕組みですが、事前にアップロードしたものを個別にダウンロードするというオンデマンド利用についてはその対象外です。「授業目的公衆送信補償金制度」という、補償金を支払うことでオンデマンド授業でも使えるようにする制度を導入する法改正は実現していたのですが、補償金額など詳細を詰める必要があり、制度自体は未施行でした。それをコロナの中で緊急に使わなければいけないということで、著作権団体や文科省と交渉して、当面1年間は補償金額を無償として制度を導入することを決めてもらいました。

国立大学協会で議論すると関係者も多く、意思決定に時間がかかりそうだったので、私が声を掛けて、7大学の総長と国立情報学研究所所長が連名でメッセージを出してお願いしました。その結果、当初の予定よりも早く、4月中には制度を施行してもらい、先生たちが安心できるような環境を整えることができました。今年からはちゃんと定めた金額を払う中で制度を運用していくことになっています。

もうひとつ、最近の大きな変化としては、温暖化に関連した脱炭素化への動きです。温暖化は今に始まったわけではありませんが、年々、明らかに温

暖化の影響が見えるようになってきています。例えば目がくっきりした台風は、私が少年時代には時々には来ましたが、あまり経験していなかったのに、最近では毎年のように来ています。

新型コロナ感染にしても温暖化の問題にしても共通しているのは、少なからず人間の活動が原因だということと、国境を越えてグローバルな課題になっていくということです。コロナの話も、昔ならば一地方の風土病で終わったかもしれないようなものが、水際でいくら頑張っても止まらないという状況になっていますが、これは人間の活動がグローバルに行われていることの証左です。

人間の活動が地球システム全体に大きな影響を与えてしまっていることを、環境学者がずっと警鐘を鳴らしていたわけですが、それがいよいよ深刻化してきました。ここへ来て、世の中の潮目が急に変わったと感じています。日本は菅首相が、重い腰を上げてカーボンニュートラルの実現を目指すというステートメントを出しました。ヨーロッパはもっと早くから動いていましたし、中国も、それからアメリカもバイデン政権になって、きちんとそこを明確に打ち出したのです。

これらの影響を受けて反応が早かったのは金融関係です。つまり、どういう投資をしなければいけないか、銀行の方々にとっては、これはものすごくシリアスな問題になっているのです。

2030年までに温室効果ガスを50%削減しなければその先はないということを世界の環境学者が言っています。日本もその直前まで2013年比で2030年は26%削減と言っていたのが、環境サミットで46%削減と言わざるを得なかったわけです。それをどう積み上げるか、11月のグラスゴーで開かれるCOP26で、きちんと中身のあるものを示せるかどうかは日本の国際信用という意味で問われている状況です。

総長任期の最後の2年で、IARUの議長を務めました。ちょうどコロナになってしまったので、IARUの一番重要な活動である学長会議はオンラインになりましたが、そのおかげで、むしろ頻度を上げて議論することができるようになりました。それで明らかになったことは、イギリス、米国は市場化がものすごく進んだ大学モデルに突き進んでいたということです。

大学の収入は一番には授業料収入です。ですから、アメリカの有力大学の授業料は年間数百万円と非常に高額になります。それから、病院のある大学

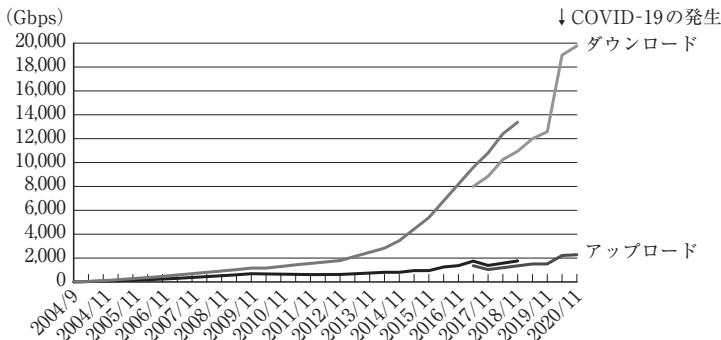


図1 日本のインターネットにおけるデータ通信量の推移 (試算)

(総務省「我が国のインターネットにおけるトラフィックの集計結果」をもとに作成。2004~18年の実線はISP 5社、2017年~の実線はISP 9社のデータに基づく推定値)

であれば、診療報酬、さらにはスポーツビジネスなども重視されています。ところが、例えばUCバークレーは、コロナ禍の影響で大学スポーツに関連する収入減等で3.4億ドルの財政危機を迎えていると学長がおっしゃっていました。つまり、この市場化モデルは行き過ぎたということが、今、かなり深刻に検討されています。大学のビジネスモデルは、いわゆる市場原理主義でかなり成功していた部分はあったわけですが、コロナ後を考えると、これから目指すべきはそこではないと思います。

つまり、大学が公共的な機能を果たし切れないのではないかとこの見直しが始まっていて、モデルをどう作り変えるかが真剣に議論されています。今、日本でも大学改革の議論が非常に活発になっていますけれども、80年代、90年代の米国モデルがよかったという人たちが主導権を握った議論をしている中で、私は後発の優位性を生かして、要するに、市場原理主義に行き過ぎなかったことを優位だと考えて戦略を立てていくべきだということを、発言し続けています。

コロナは明らかにデジタル革新を加速しました。図1はインターネット上の通信量を示したものですが、コロナのところで急拡大します。非常に急速な伸びです。

その中で、日本は第5期科学技術基本計画で、第5の社会、「Society 5.0」を目指しますと言っています。しかし、その詳細はこの第5期科学技術基本

計画の中にはほとんど書かれていません。

私もこの第5期科学技術基本計画を策定する委員会に加わっていましたが、Society 5.0という言葉は閣議決定のふた月ぐらい前に突然入ってきた言葉でした。それまではIoTプラットフォーム、Internet of Thingsのプラットフォームを国が主導して作るとか、データが大事とか、そういう内容が入っていたわけですが、それでは国家の基本計画の柱にはならないのではないかと議論していたのです。それを受けて、おそらく経団連あたりの議論が中心だと思いますが、最後の段階でSociety 5.0という言葉が入ってきたわけです。

そういう状況なので、Society 5.0の内容は、第5期科学技術基本計画が走る中で具体化されていきました。例えば私が参加した未来投資会議でも、デジタルトランスフォーメーションが明らかに重要であって、それをうまく活用することで、誰もが活躍できるという議論が行われました。Society 5.0はインクルーシブネス、包摂性を前面に出した社会、経済のシステムだと閣議決定文書でも書いているわけです。

私が総長になった2015年頃の議論は、日本の産業の調子がよくないという中で、高度経済成長のときには第1次産業から第2次産業に転換し、オートメーションと品質管理という、日本発の産業イノベーションのような形で富を得ることができた。それから見ると、日本の第3次産業は目立って生産性が低いので、第2次産業から第3次産業に転換するとともに、第3次産業をもっと高度化して、そこで勝負することが重要だという議論が行われていました。しかし、私はそうではないのではないかと考えたのです。

変化のスピードを考えると、産業転換をする中心的な担い手になる人は、現在の社会で中核となって頑張っている人たちであるはずですが。私の研究室を卒業した100人ぐらいの顔を思い浮かべて、どのセクターにいるか考えると、私の研究室を出た大変優秀な卒業生のほとんどが第2次産業に関連した職場で活動しているわけです。彼らが現役として社会で活躍できる、向こう20年ぐらいの間に何をすべきかを考えたときに、第2次産業から第3次産業に転換するというのは、あり得ないだろうと感じていました。

そのときにSociety 5.0という、言葉が先行したわけではありますが、知恵が価値を生んで、個を生かす社会、インクルーシブな社会になるということだとすると、この変化は第1次産業、第2次産業、第3次産業、全て同時



に起こるはずです。

例えば、第1次産業で、農業の生産性を上げるときに、北海道のような大規模農地を機械化するのであれば労働集約から資本集約と同様のことですが、データを活用したスマート農業で、都市周辺の小規模農地において、付加価値の高い作物を生産する生産性向上が実現しています。未来投資会議では、それを実践している方が自分の作った野菜を持ってきて紹介していました。彼の農地は10アールぐらいの小さな農地がばらばらに散在していて、大規模集約化とはまったく違う方向ですが、気象をはじめとしたデータをうまく使って収穫の時期などを精密に制御して、非常にコストパフォーマンスよく高品質の農産物を生産しているのです。

あるいは医療分野で、データを活用すればテーラーメイド医療もできますし、あるいは遠隔医療もできますし、リモート手術も、研究段階ではありませんけれども進んでいます。

私の研究に関連する分野では、総長になる前に物理学の研究と併せて、光科学を使ったものづくりの研究を始めていました。3Dプリンターによるオンデマンド生産とか、鉄とアルミのように性質の異なる素材を、光を使ってうまくつなぐ技術を開発すれば、ねじのない機械ができるとか、そういった研究です。例えば3Dプリンターは単品生産、つまり一品生産をコストパフォーマンスよく、しかも品質を落とさずに提供できる技術に進化してきています。

高品質大量生産モデルのときとは技術が違って、鍵になるのはやはりデータ活用です。安いコストで一品生産できるようになれば、人が物に合わせるのではなくて、物作りを人に合わせ、個の多様性を生かすサービスが登場する、つまり、第2次産業でも転換が起きるわけです。このように、データ活用によって全てが同時にパラダイムシフトしていく。そうすると、当然リモートの活用ができますから、都市と地方の格差も減っていくかもしれません。そうした社会がSociety 5.0なのだと考えればよいという議論をしてきました。

たとえばUberが典型ですが、車の所有はカーシェアやライドシェアに移りつつあります。モノ中心のときには、格好がよくて燃費のいい車が高く売れたので、それを目指して材料、部品、製品と作っていきました。もちろん売らなければならないので、付加的にデザインなど、ソフトの部分も考えて

きたわけです。しかしこれからは、むしろ経済的に評価されるものが、車を運転すること、あるいは車で移動することというサービス、ソリューションというソフトの部分にシフトしつつあるわけです。

そのときに、基礎になるのは、やはりデータです。ディープラーニングのインパクトがかなり大きかったことは間違いありません。大量のデータがサイバー空間に蓄積されてどんどんたまってきているわけですが、ディープラーニングという手法によって、そのビッグデータを劇的な効率で活用できるようになったのです。その技術が相当進歩して、特に、具体的には画像認識のアプリケーションが多いのですが、データ活用が急激に進んできました。ただし、この社会になっても人間はリアル空間に住んでいるので、モノがなければなにもできないわけですから、物の価値をきちんと維持していくことも忘れてはいけません。

中西宏明さんが先日亡くなったことは大変残念です。中西さんとは、Society 5.0について、東京大学が経団連、GPIFと共同研究をするという、少し変わった連携をさせて頂きました。この成果を報告する際に、まず Society 5.0の定義を示しました。Society 5.0はデジタル革新でフィジカルとサイバーの世界が高度に融合して、その結果、安心で快適な暮らしと新たな成長機会を皆でつくり出ししていく、誰も取り残されないインクルーシブな人間中心の社会であると定義したのです。

最新のデジタルテクノロジーを駆使してビッグデータを活用することによって、時々刻々と変化するいろいろな情報をリアルタイムで取りながらサービスを提供することによって、大量生産の時代に切り捨てられていた多様性を尊重する社会が実現するという願いを込めて Society 5.0の中身を定義しました。しかし、自動的にそういう理想の社会に向かうかということ、そう簡単ではありません。例えばデータはデータを持っているところに集まるという性質がありますから、何もしなければ Google のような大企業がデータを独占する社会、デジタル専制主義になりかねません。あるいは、我々もコロナ禍で痛感したように、様々なことをうまく管理するには人々の動きなどをデータ化して、それを活用することが合理的です。それを効率よく活用するにはデータ監視、管理の手法が有効であるということになっています。今、そちら側に傾く傾向も相当強くなっているとは思いますが、一方で、私たちが思うよい社会が何かというのは、今日を中心課題だと思いますが、リベ

ラルでデモクラティックな社会として質を高めていくという方向性は、日本においてはほとんどの人が合意するのではないのでしょうか。それはデータ監視、管理とは対極にあるはずです。

そうしてみると、Society 5.0 に向かう道のりの両側には崖が存在しています。デジタル革新があれば自動的に Society 5.0 に向かうというような甘いものではなくて、そちらに向かうよう、意志を持ってつかみ取らなければいけないのです。デジタル革新が背中を押してくれる可能性があるというのは、例えばコロナの中で人々の動きの増減を、携帯電話と基地局との通信情報を活用して、匿名のまま分析しています。これは、日本で独自に開発されたユニークなシステムだと思えます。

例えば、今、コロナ禍の中で外食することは少ないですけれども、外食する際、どこに食べに行こうか、スマホを使ってデータを見ながら、それを参考にして行動選択していることが相当多くなってきました。私たちは、知らず知らずのうちに、フィジカルとサイバーが融合した中で暮らしているのです。

データは、災害に対してもものすごく強力です。例えば数年前の西日本豪雨のデータについて、気象データと、河川のデータ、あるいは下水管の配管データなどを組み合わせて AI 解析すると、何百人が亡くなった大きな災害がどこで起こるかということが、事後的にはありますが計算できたことが分かっています。

当時の技術で 10 時間ぐらい計算機を回すと分かったという話でしたが、リアルタイムで降雨データを取りながら、そのデータを、例えばネットワーク上につながっているスパコンでリアルタイムジョブを回せば、5 分で解析できるはずだそうです。30 分後の洪水の予測が 10 時間かけて分かったという話と、5 分でできるということでは、使うデータ、使う解析は同じでも価値は全然違うわけです。何百人という人の命を救える可能性があるということで、データをリアルタイムで処理することによって、大きな価値のあるものが生み出される可能性が出てきます。

今、オリンピックが開催されていますが、「LIVE」と出ている映像と、そうでないものがあります。LIVE と出ている、「今やっているんだ」と思うと、「結果はまだ誰も知らないんだ」と思って、わくわくしたりするわけです。そういうリアルタイム性が、今後どううまく使われていくかが鍵になる

だろうと思います。

その中で、私が総長時代にいろいろなところで紹介してきた話ですが、大学はとんでもなく高品質なネットワークをオペレートしている集合体となっています。学術研究機関をつないでいる SINET は、全都道府県を 100 Gbps 以上の超高速ネットワークでつないでいます。これは世界に類のない密度で配備されたネットワーク網で、日本の中でも、例えば行政ネットワークや他のネットワークと比べると、桁違いに高品質です。

来年度からは SINET6 に移行しますが、沖縄を除く全ての都道府県が 400 Gbps の回線につながります。リアルタイムでデータを使うことによる価値の差分がまさに勝負どころになる中で、それをうまく生かすことによって、経済活動にも直結するものになっています。そのようなものが、既にわれわれの手元にあるわけです。ただ、これをきちんと機能させるためには、大学が産官学民の連携の中で、全体として、システムとして機能する必要がありますが、東大だけが頑張ってもできません。

中央教育審議会の大学改革の答申などを見ると、18 歳人口が何年にこう減って、という議論から始まります。大学の活動が生み出す価値が何の役に立つかというときに、18 歳の人を 22 歳まで育てて送り出すという機能に限定しているからそうになってしまうのであって、デジタルインフラを支える高度な人材が集まっていて、そこで教育もするのが大学だと再定義すれば、戦後の学制改革で全都道府県に大学を設置したことが極めて先見の明のある先行投資であったと言えるはずですが。そうした資産が今、手元にあるのに、コロナ禍で時代遅れになってしまった欧米の市場化モデルを追認するような議論はあまりにも知恵のないことだと嘆きながら叫んでいます。

そういう意味で、総長時代にもずっと言っていたように、サイエンスとテクノロジー——私はサイエンスの分野から来ましたけれども——だけでは無理で、例えば、社会システムとしてどういうルールが合理的かを考える必要がありますし、経済メカニズムによって、多くの人が自発的に参加するような仕組みも考える必要があります。こういうものをクリエートしなければいけないので、どの分野にとっても創造的で、非常にわくわくするような、学問的な作業が求められています。これらを三位一体で考えて「ビジョン 2020」でも SDGs でもいいのですが、そうしたものを意識しながら、よりよい社会を目指して進んでいくのだと思ったわけです。

私がこれを学内の会議などで説明したときに、そもそも「よりよい」とは何かということを考えないといけないのだというご意見をいただきました。それが今日の、まさに中心課題になってきていると思います。さきほど、DXをうまく使うと言いましたが、そこで目指すべきは明らかに行動変容です。だから、「よい」とは何かは後で議論していただくとして、よい形につながるような行動変容を促すメカニズムをどう作っていくか、どういう技術が必要かということが、まさに今、議論になっていると思います。

そういう意味で、理系ですとあまり気にせずに「よい社会」、あるいはリベラルでデモクラティックな社会はみんなが求めるでしょうと言ってしまうのですが、そもそもそうした価値観を相対的に捉える立場もあるわけです。何千年の人間の活動の中で培われてきたものにも学びながら、未来を見据えていく必要があるということだと思います。

そのような思いでいろんなことをやってきましたが、大学から外への発信で一番効果的なのが入学式や卒業式での式辞なので、幾つか例を挙げてみます。いつも何を話そうか、学内の先生方とも相談しながら、毎年、非常に時間をかけて準備してきました。振り返ってみると、言葉に関する話題になることがものすごく多かったと思います。

例えば、言語のルーツは人類に体毛があった時代の互いの毛繕いから始まっているという話を紹介しました。だから、オンラインのコミュニケーションでは限界があるのだろうという話。あるいは、今年3月の最後の学位記授与式では絵文字の話をして、ピクトグラムともつながるわけですがけれども、そういう言葉や文字をもう少し広く捉える。あるいは、インクルージョンが大事だとか、地域との関係なども扱いました。

比較的初期の頃、2016年、総長2年目の4月の入学式で、橋本進吉先生の記紀万葉の時代に母音が8個あったという研究について、史料編纂所の先生が面白いと教えてくださり、その話題を題材にしました。「テープレコーダーもないのに、母音が5個ではなくて8個だとなぜわかったのだろうか」と不思議なのですが、万葉仮名の使い方を丁寧に解析すると、母音が8個あったことが分かったということなのです。しかも、研究の中で、漸くそれを突き止めること出来たぐらいのタイミングで、橋本先生は、江戸時代に石塚龍磨さんという方の研究が既に存在していて、ポイントとなった仮名遣い

の分類について見いだしていたことも再発見したという非常に面白い話でした。式辞ではその点も紹介しました。

そういう古文書に記録されているものは千年スケールの学問ということになるわけですが、それが地震学と融合する研究として発展したという話もあります。あるいは、日本は物理学が強いわけですがけれども、日本の初期の物理学の重要人物の一人である長岡半太郎先生が、近代の物理学を学ぶ中で自信を失いかけていたときに漢籍を読んで、東洋人の先達の発見に気がつき、勇気を取り戻し、また物理学に戻るということが出来たという話を紹介したこともあります。いろいろな価値をきちんとたどる上で、やはり古くからあるものは重要なのだと思います。

2019年9月の式辞では、文系・理系という区別そのものを、今まに見直さなければいけないと話しました。さきほど紹介した、三者をリンクさせて、よい社会を目指す作業をみんなでやろうとすると、もはや分業は成り立たない状況になっています。逆に言えば「そこにものすごくワクワクするような新学問があるので、そこに挑戦してください」ということを言いました。

無形の知の価値化という意味では、形のないもので稼ぐというときに真っ先に思い付いたのがあの吉本興業でした。吉本さんは各都道府県に「住みます芸人」というのを配置して、インクルーシブネスを追求しながら、SDGsにも興味を持った活動をされていたということで、東大との連携の話も進みました。その一環で、私の任期の最後で、佐藤健二先生とピースの又吉さんの対話が安田講堂で行われたわけです。

あるいは、世界の研究者、知識人と、東大の知をつなぐプラットフォームをつくりたいということで、「東京カレッジ」を、羽田正先生などに尽力していただいでつくりました。その中心理念は「発見の喜び、知の力の共有」です。新しい知を生み出すことは、どんな分野でも、ものすごくワクワクすることです。大学にいる人たちはそれを経験しているから、病みつきになって出られなくなってしまった人たちばかりではないかと思いますが、そこをうまく、広く伝えたいというのがこのコンセプトです。

このように、2050年を見据えた課題を具体的に掲げながら、さまざまな連携をしています。東アジア藝文書院の企画もそういう趣旨だと思っています。

つい最近、8月3日に、「グローバル・コモンズ・センター」のロゴデザ

インを東京藝術大学に作ってもらったのですが、その発表をウェビナーで行いました。美術学部長の日比野克彦さんとゆっくり話すのはほぼ初めてでしたが、ディスカッションをして、意外に近いことを考えていることが分かってとても面白かったです。

この「グローバル・コモンズ・センター」は、先ほど中島先生の話にもありましたように、いま、地球環境が悲鳴を上げている状態で、その原因は明らかに人間の活動にあります。地球をコモンズとして守りたい、それを東大が主導していくということを宣言して、このセンターを設置しました。

何を根拠にして守っていくのかというときに、やはりデータが大事だということを考えました。ところが、私たちが常にスマホを参照しながら行動選択するほどにサイバーとフィジカルが一体化している中で、サイバー空間は、実は野放図な状態になっています。フェイクニュースもあふれているし、放送法では禁止されているような用語も飛び交うし、個人攻撃も目に余るものがあるし、あるいは国境を越えたサイバーテロも横行している。このように荒れ果てたサイバー空間と地球はすでに一体化しているのです。それでは地球をコモンズとして守れないので、サイバーをきちんとコモンズとして管理していくことも同時にやり、その中で、地球を守っていかうとしています。行動変容を促すようなデータをみんなで共有できるようにしていくイメージです。

それを、いろいろな海外の研究機関の方々と連携してやっていきます。そのときに考えたことは、例えばゼロエミッション、カーボンニュートラルといったエネルギーの部分にのみ着目していると、トランプ大統領のように「私の国は不利だから」と、離脱してしまう国が出てまいります。グローバル・コモンズは国際連携がないと始まらない話なのに、国連的な仕組みは現在ではなかなかワークしなくなっていることを考えなければいけません。

ですから、コモンズを守るために大事なもの、エネルギーはもちろん大事ですけれども、例えばフードの問題、都市の造り方の問題、あるいはサーキュラーエコノミーも大切です。デジタルのサイバー空間のコモンズの問題がリンクしている形で、これらを総合的に管理していかう。その上で、企業や国の現在の行動について、ポジティブなのかネガティブなのかを指標付けしながら、全体として連携できるようなフレームワークをつくりたいというアイデアです。

その第一歩として、各国の現状を総合的に指標付けする、グローバル・コモンズ・スチュワードシップ指標の策定を進めています。昨年12月の東京フォーラムで、そのプロトタイプとして、まずは50カ国についてデータを示しました。これにより、我々が何をしたいかが具体的に伝わったようで、かなりの反響を呼びました。同じく東京フォーラム2020で、前国連気候変動枠組条約事務局長のフィゲレスさんの講演で「2050年にカーボンニュートラルを目指すといっても、2030年に50%削減を実行できなければ、人間はその後地球環境をコントロールできなくなってしまう」という発言があったことも印象的でした。

グローバル・コモンズ・スチュワードシップ・インデックスのイメージは、ESGがかなり浸透してきてはいますけれども、より具体的な指標を作ることによって、投資家も参照できるようにしつつ、産業活動がサステイナブルに回っていくようにしたいと考えています。そういうものを、グローバル連携の中でつくっていく、その中心の場所を東大が提供するというものです。

もうひとつ、公共的な存在である東大の活動を支えるための財源を、学問の自由が憲法に書いてあるのだから、国が無条件で保障すべきだという議論のままでよいかということです。憲法に書いてあることからといって、待っていれば自動的に国がやってくれるというわけではないことは明らかなわけです。

しかし、公共をみんなで支えるという仕組みは絶対必要であるはずで、そのときに、資金の調達の方法についても、新しい考え方が必要なのではないかと、大学改革を進める中でずっと案を練っていて、その集大成的な形として、40年という長期の債券を発行しようということになりました。

大学債は、制度としては以前から発行できることにはなっていました、例えば学生寮の整備のように、目的がはっきりしていて、債券で調達した資金を投資した事業の収益で返済できることが債券発行の条件でした。今回東大が発行した債券はそうではなくて、大学全体として返済を保証し、実施する事業については大学が自由に判断できるという、プロジェクトファイナンスではなくて、コーポレートファイナンス型の債券なのです。それを活用して、大学がよりよい社会をつくるために多様な活動を行うということです。



そのための資金として、償還期限 40 年で 200 億円の債券を発行しました。ありがたいことに、発行額の 200 億に対して、1,260 億円もの申し込みがあり、利率も、財投機関債、政府系機関の発行する債券並みという非常に低い利率で発行することができました。そういう長期的な投資に対して市場がしっかり動いてくれたということはとてもよかったと思っています。マーケットからの評価は、東大債に対して 3 つの賞を頂いたということにも表れています。未来に対する投資がなかなか進まない中で、大学という、株式会社のように利益を追求し、それを株主に配分するのではない存在が経済活動の中に入り込んでくるということを、少なくとも市場はウエルカムという判断をしたということは重要だろうと思います。

これは、公共を支える新しい仕組みを創り出したということで、官にもよい。ESG 投資、CSV の流れに合致して、お金を動かすことに大学が能動的に動いたという意味で、民にもよし。これは自由裁量で使えるお金なので、大学の運営がものすごく自由度を増すということも確かです。実際、今回の債券発行の半分はコロナ対応の施設整備に使えました。これは文部科学省の補助金を待っていたのでは間に合わないわけです。私たちが一番大事だと考える学生ファーストの投資を、学内だけの判断で、規模感を持って進めることができました。それが、市場から見ても今やるべきことだと認められている状況になっていると思います。

最近では、知識集約型社会における包摂的成長、インクルーシブ・グロースが大事という議論になっています。つまり、高度経済成長のように、とにかく拡張していけばいいという状況ではもはやない中で、それでも経済は成長し得るのかということが、ダボス会議などでも中心課題になっていました。

そのときに、デジタルトランスフォーメーションは、明らかに重要なツールになります。しかし、それ自体が目的ではありません。また、デジタルトランスフォーメーションの流れに任せたまま放置しておく、どう考えても 2 つの深い谷のどちらかに行ってしまうと思っています。

そのときに、公共を担う経営体としての在り方として、会社ではないけれども、国立大学法人として、法人格を持つものが踏み出していこうとしているのです。これが NPO とは少し違った形で、組織として、もっと社会をよくするための活動を拡大するという、成長を内包した形として存在できない

かということが、私が進めてきた大学改革の背景にある考えだったかと、今から思い返すとそう思います。

問題は、コモンズというのは小さい入会地の場合には、周りの人たちの損得ともある程度合致して守れるわけですが、大きくなるとだんだん責任感がなくなって、どうしても「コモンズの悲劇」になってしまいがちだということです。それをグローバル・コモンズという地球規模で成り立たせるにはどうしたらいいかということは、ものすごく大きなチャレンジであると思います。

私が総長任期の最後に出した『新しい経営体としての東京大学』（東京大学出版会）の最終章で、岩井克人先生と対談しました。岩井先生は、新しい資本主義を求める中で会社をどう考えるかという研究をずっとされています。この辺の考え方について最近は大いぶ理論的なサポートをしてもらっています。私は物理学者で、経済学をきちんと勉強したこともないのに経済学に踏み込んだような話もしていて無責任にならないかと心配していたわけですが、岩井先生にも私の主張をご理解いただいて、よい議論が進んでいます。

岩井先生にも、DXは資本主義と民主主義にとって危険な奈落、2つの奈落を掘り下げるといえることには同意いただきました。それから、中国が進めたような国家資本主義はやはり資本主義にとって非常に危険ということもおっしゃっています。経済メカニズムに関して、私が度々使っているものに、代表的な企業の時価総額と売上高の比という表があります。これを見ると、バイドゥ、アリババ、テンセント、あるいはGAFAは、非常に大きな数値になるのです。すなわちこれらの企業は売上高に対して市場が評価する株価が高いのです。

これに対して、日本の物作り中心の会社は、売上高と時価総額が同じくらい、あるいは時価総額のほうが低くなっています。つまり、株主、投資家の期待値がどんどん高まるようなアピールをしながら経済が成長してくるのがデジタルトランスフォーメーションをうまく捉えたビジネスの特徴になっているのです。一方で、日本はリスク投資が進んでおらず、そうした形の経済成長が起っていないことは明らかです。しかしこれは、今の状態がこうなっているということにすぎず、この数値を上げればよいというものではないだろうと私は感じています。しかし明らかに米中とは状態が違うわけ

です。

今日のテーマは価値について考えようということですが、なぜ今日のような議論が大事だと私が思っているかということ、デジタルトランスフォーメーションは、好むと好まざるとにかかわらず、資本集約から知識集約への不連続な変化をもたらして、どんどん進んでいます。その中で、今述べた、期待値ビジネスが非常に主導権を握っています。しかし、これまで資本主義のさまざまなルールは有形の物をベースに作られてきたので、無形のものについては必ずしも正しく価値付けされていないと感じています。「正しく」という意味は、社会的な重要性和価値付けの相関が取れているのか、つまり、価値付けしやすいものに高い値が付いてしまっているのではないかということです。

例えば、Googleの広告料収入というのは、Googleにとっては極めて合理的なビジネスモデルなのでしょうが、それが社会の基本を支える資本主義の役割から見たときに適切なのかどうか。それがもし違っているのなら、どう修正したらいいのかということを議論する必要があるように思います。また、岩井先生との議論で、お金の価値が最近弱まっているという指摘もいただきました。つまり、給料が安くても休みがきっちり取れるほうがいいのか、そういう評価もあるということです。価値の重要性が、人そのものにシフトしていて、人はお金では買えないことが本質だと岩井先生はおっしゃっています。

しかし、価値を担うものとしての貨幣の位置付け、役割が変わるのだろうかという疑問もあります。つまり、お金の価値が弱まっているという言い方で十分なのかどうか、お金の意味合いをどう変えていくかというアプローチもあるかもしれません。あるいは、そういう経済的な価値以外の価値が力を持つ、あるいは、それが社会を支えるというような仕組みはあり得るのだろうか。

それからもうひとつ、資本主義を鍛えて守る。資本主義をやめたいという人には私はほとんど会いませんでしたが、伝統的には、経済学の専門家は市場をよくすればいいと考えることが多いようです。資本主義をよくするには市場の質を上げることだということを使う場合が多い。私たちが進めているグローバル・コモンズ・ステewardシップ・インデックスなども、その延長的な考え方だとも言えます。

岩井先生は、株式会社というのは、株主が株式を保有する「物」としての性質と、法人として資産を所有できる「人」としての性質の2階建て構造になっていて、その「物」部分だけが過度に強調されていたのが問題で、この二つの関係を多様化することによって資本主義はよくなるかもしれないということを議論されています。この辺の話は、岩井先生が『一橋ビジネスレビュー』の2020年冬号に書かれたものを参照してください。

私は、既存の経済原理に沿って値付けするという話では多分駄目なのだと思います。私が「大学が新しい経営体になる」と言った思いは、経済システムについて一石を投じる中で、NPOなども含めて、公共的なものを支えるセクターが成長し得る経営体として存在し、その経営によって出てきた利潤が、公的な活動を拡大していくというモデルが経済システムの中に入っていくような資金循環ができるとよいのではないかと思います。

今まで経済における競争原理からは一線を画したところにいた、大学のようなものが入らざるを得ない状況になっているときに、欧米で進んだ、学生を客と捉える市場化された大学モデルに倣った改革を周回遅れで進めなさい、という圧力をはね返すためには、このようなロジックと行動が必要だったとも言えます。相当頑張って、大学債発行までたどり着いたので、これについての評価を正しくしてもらえるように活動を続けていかないといけないというのが今の実感です。

アベノミクスでお金を作ったけれども、それが一番大事な未来のための投資につながっていないところが大問題です。大学は、その受け皿として機能するというのを大学の責任としてやっていかなければいけないと考えています。そういうイメージを前提としつつ、これを実体化するのは人ですので、今日の「人の価値化」というテーマを私なりに捉えると、こうなるという話をさせて頂きました。この後の議論を楽しみにしています。以上です。

## 討 論

**中島** 五神先生、ありがとうございました。せっかくの機会ですので、五神先生とQ&Aのセッションをしたいと思います。今日のご発表を伺って、6年間の総長時代、そして今年も含めてですけれども、どういう方向で五神先生が大学というプラットフォームを考えてきたのか、それが明確になったと

思います。

ご指摘いただいたように、じゃあデジタルトランスフォーメーションに任せておけば「Society 5.0」が目指すような、よりよい社会にいくかという、そんなことはなくて、やっぱり崖があるわけです。サイバー空間が民主的じゃないということは、これはもう多くの人が共有している認識だと思います。それに対抗して、GAFAのようなプラットフォームではないようなプラットフォームを構成できるか。それが五神先生のお話だと、大学、そして東大が始める「グローバル・コモンズ・センター」のような発想だと思うんです。

やはり、ここで民主主義が問い直されているのだと思います。GAFAのようなプラットフォームがつくり出すのはどう考えても民主的ではないわけです。それに対抗して、大学というプラットフォームが、あるいはプラットフォームが民主主義の可能性をもう一度体現するという、それが必要だと思うんです。その際に、五神先生が強調されていた中で大事だと思うのは、大学にちゃんとした仕方投資をすることだだと思います。

資本主義を諦めないということは、投資ということを諦めないということなんです。今までの投資と違う、新しい投資、無形資産への投資でもあると思います。最近の言葉で言うとインパクト投資のようなものです。五神先生が大学債ということで発行されたものは、別の言い方をするとインパクトボンドというような言い方もありますが、そういったものの先駆けのものだと思うんです。

これは、資本主義自体にもう一度理念を取り戻させるようなものでもあると思います。資本主義にはいろんな変遷があったわけですが、初期の資本主義は、ある意味で経済と人間、あるいは人間の倫理といいたいでしょうか、そういったものが結び付いていたわけです。

それがだんだん乖離してきたわけですが、もう一度それを重ね合わせていくような方向、やはり人間を大事にしていくような方向に経済をもう一度回転させていく、そういった仕掛けとして大学が機能できないかということだと思います。

法人という概念は大学から生まれたというふうにも言われていて、そうすると、もう一度大学が新たに自らを定義し直すことによって、新しいプレーヤーとして、新しい法人として、資本主義を鍛え直すでもいいと思います

し、もう一度飼いならしていくでもいいと思うんですが、そういった役割が期待されているのかなと思います。

その上で、今日は価値、特に人間の価値化ということが問われているわけですから、大学というプラットフォーム、これが非常に今重要だということは、五神先生のお話でよく分かりましたし、東大がその方向に進み出しているというのも分かるのですが、そういう中で、人間がじゃあどのように捉え直されていくんだろうということが、大きな問いだと思うんです。

「Society 5.0」が重要だったのは、ヒューマニティーをこの中で掲げたということだったと私は理解しています。五神先生が「よりよいて、じゃあ何なんだろう」ということを繰り返し問われましたけれども、それはやはり人間にとって「よりよい」というわけです。しかし、それが単なる人間中心主義だと、環境に対する非常に大きな負荷、地球環境を破壊していくようなことにもなるわけです。人間自体を再定義していく、そういったことが大学には同時に求められているという気がするわけです。

五神先生のこの大きなプランの中で、大学を位置付け直した上で、一体そこで人間というのがどのように問い直されていくのか、そのチャンスも大学にもう一回取り戻すためには、いま一度、何が必要だとお考えになっているか、それを伺えたらと思うんですが、いかがでしょうか。

**五神** ありがとうございます。今の話を聞いていて思い出すのは、指定国立大学に申請する際の構想調書を作った時のことです。そこでは、共通標語として「地球と人類の未来に貢献する知の協創の世界拠点」を掲げました。これは当初「人類の未来に貢献する知の協創の世界拠点」で、最初は「地球」がなかったのです。学内会議で議論しているときに、私たちの学問は人間のためだけにやっているのではない、人類だけでは狭い、という指摘をいただきました。それを受けて、地球を入れないといけないと考え、地球の語を入れました。

その後の世界の変化を見ると、例えばコロナであっても、人類だけに閉じた議論では済まないわけです。人類以外の生物の要素も非常に重要になってくる。地球環境の問題にしても、まさに地球そのものの問題ですから、この標語に地球というものを入れた全学の知恵はまさにそのとおりだったなと思います。

それから、リベラルでデモクラティックなものを堅持したいということは、ほとんどの人が合意するのではないかと思います。そのポイントは個々の自由が尊重されることです。もちろん、その中で全体が調和的でないと困るわけですが、個の自由こそが一番重要なポイントになります。そして、DXをうまく賢く使えば、今よりも個を生かす社会になるかもしれないという期待があります。デジタル技術を活用し、リモート会議などによって都市と地方の格差解消や、ハンディのある人でも社会参加しやすくするということが実現できるのです。

そのときに、画一的なイメージでホモジニアスに世界全体を塗りつぶすようなことではこれらが達成できないことは明らかなので、多様性をお互いに認識しながら尊重する必要があります。

なぜいま多様性が重要なのでしょうか。例えば、これまでは基礎研究と応用研究、短期と長期の目標というように、研究をやる上でも2行2列の行列の中で考えていました。

ところが、今、例えばメッセンジャー RNA のワクチンのように、比較的最近の発見があつという間に実用までつながります。あるいは量子コンピューターも私の専門分野に近いですが、2015年に総長になったときには、使うことについて真面目に考えるのは30年先、早くても20年先と思っていました。ところが、わずか数年の間に——量子コンピューターはまだ相当に未完成ですけれども——量子コンピューターを使うことを想定しないと、未来のビジョンをきちんと描けないのではないかとこのところまでいきなり来てしまいました。

つまり、時間スケールも、基礎研究か応用研究かという話も、全体が非常に交ざった状態になっているというダイナミックな時代になっていて、そのときに、未来に向かって知恵が足りないことは確かです。知恵をきちんと積み上げていくためには、当然投資も必要になりますが、従来の資本主義のオペレーションでは絶対届かないところがどうしても存在してしまいます。

大学というものが役割を見直したり、機能を拡張したりする中で、そこに参入することによって、今の経済メカニズムの足りていないところを補えて、それが例えば医療・福祉といった分野の人たちにも影響を与えて、よりよい形の支え方の社会モデルが広がっていくことが起こるかもしれないと思ったわけです。そのときに、分かりやすさの意味で、大学から、東京大学

から始めるというのは一つの手だと思ったわけです。

債券発行のときに、なぜ200億円という規模で発行したかという、市場にインパクトを与える必要があったからです。市場の人たちが新しい市場ができたと思う規模のミニマムが200億だったということです。新聞で、東大といえども運営費が減ったりしてお金のやりくりが大変だから発行したという報道もありましたが、それは全然当たっていません。お金を調達するだけならば、東大だったら銀行から借りたほうが、利子が安く済みます。そうではなくて、市場に語り掛けて、しかも自由に使えるお金を集められるかどうかにはチャレンジしたかったのです。

大学債の最大のリスクは、発行したものが売れるかどうかでした。つまり、市場がノーと言ったら空振りで終わってしまって、もうその先はできないということになってしまいます。大学債のリスクとして、40年後にちゃんと返せるかどうかを心配される先生もいますが、それは心配するポイントではありません。40年債に対して年利が0.823%というのは、世界全体の長期的な成長を考えれば、利息がないというのと同じことです。私達のチャレンジのポイントはそうではなくて、今の経済システムの中で、大学債という新しい商品をきちんと受け入れてもらえる土壌が市場にできているのかがチャレンジだったのです。結果的にはそこは大成功でした。

それは市場からの期待なので、むしろ、それに対して我々がきちんと応えていくことが重要です。そのためには、さきほどの多様性を生かすといったことが本気で大事です。しかし、企業が四半期利益に追われるような通常の経済メカニズムの中ではそれはやりようがない、難しいなとみんなが腕組みしている中で、もしかしたらこの大学債はゲームチェンジになるかもしれないという期待が寄せられているということではないかなとも思っています。

それは総長一人の思いつきでやるようなことではありません。「地球と人類の未来に貢献する」などと、とんでもない大風呂敷を掲げて大丈夫かと普通は思うわけです。しかし、式辞の作成などを通じて、いろんな分野の多様な学問を知れば知るほど、東大にはそういうことを言っても大丈夫な資格がある、逆に言えば、資格があるのなら言わなければいけないのではないかという責任を感じたところがあります。そういう自信と責任感に支えられて大学債という大仕掛けを実現できたということだろうと思っています。

問題は時々刻々と環境が変わる中で、お金を稼いだり貯めたりすることが



大事なのではなくて、どう使うかが問われるはずです。そこは今、非常に重要な局面に入っていますが、藤井総長の下できちんとしたプランが議論されていると思います。

**中島** ありがとうございます。じゃあ、先生方から、もしよかったら質問を受け付けたいと思います。では、野原さん、お願いします。

**野原** 非常に興味深いお話をありがとうございました。非常に勉強になりました。データ独占とかというのは非常に重要だと思います。と申しますのは、いろんなデータがあるわけですが、企業が持っているデータというのは、そもそも部分的にしか、これまでも公開されてこなかったわけですが、デジタル化が進むとその企業が持っているデータの種類も量も飛躍的に増える。しかもそれは企業が公開する義務が必ずしもないし、どの程度の情報収集をしているかすらよく分からないところがあって、だから企業に、そもそもというか、特定の国家にどの程度の情報収集を許すのか、こういった議論をする必要があるのではないかと思います。

あるいは、もう少し言うと、現在ヨーロッパとかアメリカで議論されていますように、やっぱり企業のデータの収集活動に少し歯止めをかけるとか、それを議論させるというような、あるいは、どういう情報収集活動をしているかということ公開させるというような必要もあるのか、そういったことをお聞きしたいと思います。

加えて、1985年にダナ・ハラウェイという人が『サイボーグ宣言』という論文の中で、人間は既にサイボーグであると書いています。つまり、いろんな情報とかテクノロジーがないと生きていけない。その後、この20年、さらにそれが進んで、人間の能力も情報通信技術とかAIによって大きく飛躍的に発達しましたし、データを処理したりする、データの量も非常に増えましたし、人間の能力も行動も、あるいは性格も非常に変わったはずなんです。それが許されるのかどうかという議論は、やっぱり人文か社会系の人ができるべき議論のはずなんです。その際に、企業が、じゃあどの程度の情報を持っているのか、これをどう社会的に管理していくのかという論点があり得ると思うんですけども、その点に関してはいかがお考えでしょうか。

**中島** さらにお二人から手が挙がっています。石井さん、田辺さんの順番で確か手が挙がったかと思います。よろしくお祈いします。

**石井** 大変わくわくするようなお話をありがとうございました。目指すべきところは非常に難しくて大きいと思いつつ、大学人にとって大変チャレンジングでかつやりがいがあることを幾つも提起していただき、本当に興奮しながら聞いておりました。

質問したいことはデモクラシーという言葉です。何がデモクラチックなのかということに関しては、非常に難しい問題があると思います。私自身は中国のことを研究しておりますので、実は中国はデモクラチックな社会ではないと言われると、ちょっと私は、そうではないだろうと思います。中国におけるデモクラシーというものがあるだろうというふうに考えてしまうのです。中国が「民主」をあるべき政治社会の根本であるとみなしていることは憲法の条文にも、街中のスローガンにも明らかで、それはお題目でも虚偽でもないと考えべきです。しかし、概念の理解のしかたがふつうわたしたちがデモクラシーという言葉で想像するものとは異なっているということですから。どちらかだけが正しく、他方が間違っているということではなく、より哲学的な考察が大きな時代の変化の中で特に厳しく求められている概念のひとつに、この「民主」ということばも含まれているとわたしは思っています。

大学において、大学が果たすべき役割を果たしていく中で、リベラルでデモクラチックな組織として大学が機能していくという場合に、大学におけるデモクラシーというのはどのようにあるべきなのか、そしてそれをどのように実現していくのか。これは単に、例えば一般的に思われているような、議会のような、投票をするとか、透明性とかというものとは全く別のレベルでデモクラシーを考える必要があると思うのですけれども、何かその辺りについて五神先生のご経験の中からお考えがあればお聞かせください。

**中島** では、田辺さん、お祈いいたします。

**田辺** 大変興味深いお話をありがとうございました。私の質問は、先生がおっしゃった知識集約型社会を支える価値の創造というときの、価値という

のはどう意味でしょうかというものです。最初は、これは市場的なものであるというふうにおっしゃって、ただ、後では社会的課題の解決と、あるいは、よい社会と人文社会の知恵も入れてというふうなことをおっしゃいました。ただ、全体的なトーンとしましては、やはり資本主義社会の中で、社会課題の解決と結び付けることによって大学を公共的なものにするということだったと思うんです。

これについては、お話を伺っていて、きわめて困難な道でありながら、新たな領域を開く大変なお仕事をなさっているのはよく分かったんですが、しかしそれでも、この社会課題の解決ということが市場に売れるためには、やはり今の世の中において既にドミナントである価値の枠組を採用せざるを得ないんじゃないかというふうに思うわけなんです。

その中で、東大は、例えば今日触れられたような「Society 5.0」とか、あるいは「グローバル・コモンズ」ということをおっしゃるわけですが、そうすると、それに当てはまる知の枠組みだけが大学に残って、それに当てはまらないものは資源配分を受けられないという形で、大学の多様性というのが最終的に失われざるを得ないんじゃないかと、ちょっと感じる場所があるんです。

しかし、私たちはやはり、真理をこそ最終的な価値基盤とするべきでしょう。社会課題の解決という目的が付け加わったことは素晴らしいことですが、しかしそれがあまり強調されると、やはり人々が今大事だとたまたま思っているような、社会の支配的あるいは多数派的な考えに、大学の基盤が置かれてしまうということになってしまわないだろうかということです。

**中島** ありがとうございます。今、3名の先生方から質問がございました。五神先生、お答えいただければと思います。

**五神** はい。まず、どれにも共通するものですが、私は人類の未来をよくすることに大学は大きな責任を持っていると考えています。その「未来」は、子や孫よりも、もっと先の未来かもしれません。東京大学の研究の中には、何千年、あるいは宇宙物理学をやっている人たちは百何十億年というスケールで見ているものもあります。ですから、未来に対してどういう責任を持つかという視点は多様で、その多様性は担保しなければいけないというか、大

学にとって最も大事なところでは。

例えば、市場をどう考えるかを考えたときに、多くの方は現在の市場メカニズム、経済システムをそれほど大きくは変えられないという前提で議論しています。私の総長時代の経験では、2050年のエネルギーシステムについて議論する会議に参加したことがあります。そのときに、2050年は人口がどうなって、その前提からいくと、様々な発電方式による電気のエネルギーミックスを何%にしなければいけないという議論から始まりました。

私は「今のエネルギーの使い方のままで2050年を迎えるわけにいかない」と発言しました。エネルギーは、例えば風力発電、太陽光発電、火力発電など、いろんなエネルギーがあって、それぞれ特性が違います。その使い勝手によって値が付いているわけですが、それは、人々がどういうふうにしてエネルギーを使いたいと思うかによって、重み付けが変わってくるはずで。2050年、2100年の社会がどうなっていて、そこで経済メカニズムがどうなっているべきか、社会がどうあるべきというところからバックキャストして考えていかなければ意味がありません。

そのときに大事なことは、現在の雇用を守る経済システムがあって、会社の経営者はみんな四半期利益をきちんと出していくことが株主に対する最低限の責任なので、それができないCEOはすぐに首になってしまいます。長期ビジョンを考えるにしても、そこと連続してやっていかなければならない。だけれども、どのように長期と今をつないでいくか、長期のビジョンを掲げるときに、四半期利益できゅうきゅうとしている中で未来を考えるという産業界だけに任せるのはやはり理不尽なわけです。

東大で言えば、百四十年以上にわたる活動を見れば、その歴史で培ってきた、国民の支えによって培われた信用というのがあって、それが一気にゼロにはならないはずで。であるとすれば、大学はその超長期のところとつなぐ役割を果たすべきです。経済活動は私たちの仕事ではないと切り離してしまったら、大学でなければできない責務を果たせないことになってしまいます。それは非常に大きな責任です。私は大学のトップとして、そこはちゃんと考えなければいけないとずっと考えてきました。それは大きな責任なので、自分たちのコンフォートゾーンに逃げ込むことは簡単だけれども、それでは済まされないと考えています。

私が総長になった頃は、産業界や政府の人々は東大に対してものすごく疑

間を持っていたし、口を開けば「東大は役に立っていないよね」といったことが、表舞台でも平気で言われていました。しかし幸いなことに、6年を経ていろいろな方々から「相談したい」と言ってもらえるぐらいまでに、立場を変えることができました。それはやはり、東大の広い多様な知をきちんと説明する中で、期待を集めることをできてきたからだろうと思います。ただ、まだ具体的なソリューションを出すところまでは行っていませんので、この努力をやめると、一気にまた、やかましく「あれをこうせい」と言われたり、人事についても口を出されたりしてしまうことになりかねません。

いただいた質問に順々に答えたいと思います。まずデータは非常に重要です。今の産業システムの中で、データはものすごく重要な競争力の源でもあるので、それをみんなで共有することは難しい。しかし、未来に向けて知恵が足りないの、みんなで協力しなければできないところがあります。その共有すべきところできちんと、データをつくることに貢献した人たちの労に報いるようなシステムを確立しつつ、データを共有していくことが必要です。デジタルトランスフォーメーションの中で、大学がつくっていかねばいけないプラットフォームというのはそういうものだと思います。

そのためには、データが公平公正で安全に提供され、使えるという状況を作る必要があります。サイバー空間が、例えばフェイクニュースだらけといった形で荒れ果ててしまっているのは、そういう状況を作り出すのは難しくなってしまう。ですから、サイバー空間もコモンズとして管理する仕組みをきちんとつくっていくことが重要です。さらに、例えば私の分野で、レーザーを使った物作りでは多様なデータを共有するものすごく効果的であることがわかってきました。そうした場合には、データを公共にオープンにしていくことも重要です。システムティックにデータを生成して共有するコンソーシアムをつくって、何十社という会社が参加している活動が東大の中でも起こっていますが、そういうようなものも一例になると思います。

GAF Aのような会社と話をすると、彼らが東大に興味を持っている理由は、一つはフォーマット化されたきれいなデータにアクセスできることです。もう一つは、諸外国に比べると外に出にくい日本人の優秀な頭脳です。その2つを東大との連携で獲得したいと思っていることは明らかです。ですから、私たちはただ単にそれをあげてしまうのではまずいなと思っています。

す。いろいろ考えた結果、データをきちんと管理しながら、オープンなものはオープンに提供する仕組みをつくっていくことが重要と考えています。

さきほど紹介したとおり、物作りの中でも、データは非常に重要になってきていて、そのマネジメントをきちんとやることによって、むしろ競争力を高めるということは可能だと思います。ただ、ブラックボックス化するところはブラックボックス化して、競争力を確保するという戦略も当然重要です。

石井先生の質問の、大学のデモクラシーとは何かということについて、元々、法人という概念自体が大学から発生したとする議論もあるようです。あるいは教会発祥の概念という話もあるようですが、公共を支える大学がどう成長していくか、大学のミッションが明確化していく中で、デモクラシーという概念も深めていく必要があるように思いますが、どのように意思決定すべきかを考えていくべきだと思います。

例えば、研究者の研究評価は論文の引用数のような指標が便利だから利用されるわけですが、この仕組みは100年も持たないと思います。30年も持たないかもしれません。研究者集団という「村」があって、その中の人気投票になってしまっているからです。

あるときにある分野の研究がものすごく流行って、研究者人口が非常に多い分野があるとします。その人たちが、今持っている研究室の実験装置とかを使ってできる分野の研究をしようとするわけです。その領域に新しいテーマを投げかけた人は、ものすごく評価されることになります。でも、20年経ってみると全然評価されないという場合があるのです。

そうした例を見ると、内輪の評価というもの共感性を持たないということになります。大学が担っている、人類の知恵をもっと広げていこうという活動は、その知恵をつくるコミュニティーに閉じたものではないので、広がりを持った役割を担っている責任があると思います。

そのときに、専門家として知恵を持っている人と、非専門家は言うまでもなく非対称です。岩井克人先生との対話の中で学んだことですが、人間社会において、全てが対称になることは絶対にありません。専門家、非専門家という非対称な関係性の中で優位な立場にある専門家はどのような責任を果たすべきか、その責任をどうやって認めてもらうかという信頼を確立する、そういうガバナンスをきちんとつくっていく必要があります。

国立大学法人になる前は、東京大学の教職員は国家公務員でした。学問の自由を守るために、東大の歴史の中でも、戦前含め、随所で政府との関係性がシビアであった時期もありました。とはいえ、大学人の努力で学問の自由を勝ち取ったということでは必ずしもありません。大学の大きな構造改革は東大創設以来何度かありましたが、自らの意思で大きく変えたという例は見当たりません。戦争に負けたとか、産業界がこういうメッセージを出したとか、そもそも創設も、明治維新の過程で国の形をつくるために創られたわけですから、そうした要因はすべて外的なものです。

そこについてどういう責任を持つかということは、未来に向けてどういう機能を持ち得るかを深く議論する中で決まってくるものだと思います。しかし、知をつくるという、一般の人とは違う活動をしていることは確かなので、その当事者であるわれわれ自身が一番重大な責任を担っていることは間違いありません。内輪の議論、独り善がりの議論にならないよう、真剣な議論をきちんと深めていくことが、まさに求められていると思います。

その議論を、藤井総長の任期の6年間できちんと深められるかどうか、東大に対する信用が高まるか、信用を失うかという分水嶺に、今、立っていると思っています。そこは唯一、気がかりとしてやり残したことだったので、ぜひきちんとした議論を深めていただきたいと思います。

今言ったような意味での未来に資する貢献をするという意味で、例えばグローバル・コモンズを掲げました。私は、かなり基礎的な研究ばかりやってきた物理学者ですが、私の視点から見て、学問の自由を阻害する要因はないと感じています。「ビジョン2020」を作るときも、そういう制限をかけることのないようにと考えてまとめました。

総長が「この6年間こうやって走るんだ」と言って、強い磁場をかけて方向性を合わせようとしても、東大の先生はむしろ逆を向いたりするかもしれず、かえって逆効果になりかねません。先生たちは自分の信じるところに従って、やりたいことをやるわけです。中には人類のために学問をやるわけではないという人がいてもよいわけで、あるいは、何のためということもそもそも考えたくない人もいるかもしれません。

ただ、大学全体として、未来に向けてどういう責任があるだろうということ意識するような場があると、みんなが自由にやる中で、個々のベクトルの向きは相当ランダムですが、合計として、ある種の力が見えてくる可能性

があります。すぐその場で見えるようなものではなくて、100年後に向けてということでもいいと思いますが、そういう、個々の自律性は活かしたまま、しかし全体としての方向性を示せるものを掲げることが、アクションプラン的な文書の標語を考えると時には重要だろうと思っています。その理想の旗は高ければ高いほどいいと思って、どんどん上げていきました。

上のレベルに行くほど抽象的になって、何の意味もないものになってしまいかねないと思って、どんなことをやればいいのかというリストアップを2015年の夏頃にしていました。その時に、ふっと横を見ると、国連が定めたSDGsを見つけたのです。SDGsの決め方はだいぶ工夫されたのだと思いますが、我々のやろうとしていたこと非常に共通するので、SDGsと関連づけることにしたのです。

ところが、これは最初はまったく受けませんでした。例えば、2016年に東京大学が指定国立大学の申請をしたとき、そのプランは日本の産業界出身の審査員には全く評価しませんでした。東北大学は、スピントロニクスを使って情報革命をしますなど、かなり具体的な提案をしているのに、東大は茫漠としていて「あまりやる気がないんじゃないか」とすら言われました。

しかし、そのときに海外大学の学長経験者である外国人の審査員の方も何人かいらっしゃって、その方たちには、東京大学のメッセージがかなり刺さったようで、ギリギリのところ指定国立大学に指定されたようです。

今、SDGsは逆に、上滑りしているような勢いで流行しています。経団連も企業行動憲章にSDGsを掲げましたし、東大がSDGsを採用することに対して、以前相当ネガティブな意見を述べられた方も、今ではSDGsバッジを付けて活動されています。そういうことをいち早く言うのが東大であるべきだと思うのです。長期ビジョンというのは、長期のものを掲げたら、それが固定されて何十年もそれに向かって走るべきということではありません。常に50年、100年というスケールのことを考えましようということなのです。例えばコロナみたいなことが起こって、50年、100年先の姿がまるで変わりましたということだってあり得るわけです。

状況の変化があれば、長期ビジョンであっても躊躇なく変えればよいのです。知恵はまだ全然足りないわけですから、変化の激しい時期にこそ、そういう知恵をきちんとみんなで作っていくことが必要です。大学人のいいところは、その知恵をつくること、人の言わないことを見つけることをまった



く難行と思わず、むしろ喜びと感ずるところです。

私たちが楽しいと思う活動を、しっかりサポートしてもらえるような仕組みの中で、きちんと私たちも責任を果たしていく、そういうふうにしていけばいいのかなと思います。その観点からすると、今の経済メカニズムはインターネットの広告料収入の値付けが本来の経済的価値と乖離しているように思われるように、修正が必要なのだろうと思います。

もうひとつ、私が懸念していることは、圧倒的な優位性を獲得している特定の大企業が、環境などの美名の下に、他者の地道な成果を奪ってしまわないかということです。例えば Apple が iPhone をカーボンニュートラルで作りますという宣言をするとします。環境の観点からは、それは歓迎すべきメッセージでしょう。しかし、iPhone に部品を供給している日本の部品メーカーは真っ青になります。日本の電力事情からいくと、電力が全然再生エネルギーになっていないから、カーボンニュートラル化が諸外国に比べて困難で、Apple に部品を納入できなくなってしまうかもしれません。だから、それを乗り越える新しい技術を一生懸命、必死で開発するわけです。

結果的にそういう企業も部品が納品できて、iPhone がカーボンニュートラルに製造できる状況になって、世界中の人たちが Apple を賞賛して、iPhone を使うということになったときに、その血のにじむような努力をした人たちのところにきちんとした見返りが届かなければ、そういう活動はサステイナブルになりません。それは Apple も望んでいないはずです。みんなの知恵が健全な形で引き出されるような仕組みになっていないといけなのです。

だから、リベラルでデモクラティックであることに加え、それを動かすための経済メカニズムがそういう矛盾を少しでも少なくするようなものに修正できないかなということを考える必要があります。そのためには、サイエンス・テクノロジーがどういう新しい道具を提供し得るのかということと、社会システム——経済や人、社会とは何かを深く考えられる集団がきちんと活動する必要があるはずで、それはやはり東大のやるべきことだろうと思います。

それを担うのは、必ずしもグローバル・コモンズに直接関連する分野の人だけとは限らない、むしろ大学の多様な知の全体で支えていくべきだと思っています。ただ、一部の関係するところだけが支えられるのではないかと皆

さんが感じているとすれば、私の伝え方が適当でなかったかもしれないので、うまく伝えられるように改善していきたいと思います。

**中島** 五神先生、ありがとうございました。ここで五神先生の第 I 部は終わりたいと思います。



## 座談会

## 「人間」を価値化する

五神 真 田辺明生 野原慎司 柳 幹康  
石井 剛 中島隆博（司会）

## 発表1 生の意義としての価値 田辺明生

中島 それでは第Ⅱ部を始めたいと思います。田辺さん、よろしくお願ひいたします。

田辺 人類学が専門の田辺明生と申します。今日は「生の意義としての価値」という題でお話をさせていただきたいと思います。まず最初にですが、私が考えるところでは、現代世界の最大の問題は価値喪失であると思います。今、近視眼的な目的合理性に奉仕する技術・制度が発達するなかで、人間疎外と環境破壊が起きています。つまり人間と自然それ自体の存在価値が探求されることなく、目的のための手段とされることにより、こうした問題が起こっていると私は考えます。

例えば地球環境問題です。私は京大時代に生存基盤論のプロジェクトに関わっていて、この問題には結構コミットしました。現在の環境問題の議論のされ方は、人間の生存維持そして持続的な経済発展という非常に限定的な目的のための手段として地球環境を捉えている点で限界があると思っています。じゃあ、どういうふうに根本的に価値というものを捉え直すことができるのか、これを広い視座から、今日頂いた機会に考えたいと思います。

それでまず一つめに、価値とは何か、ということです。今、価値というこ

とばは、代表的には三つの文脈で語られます。1番目はやはり市場価値、あるいは市場価格ということです。これが経済学で言われています。2番目には社会文化体系における価値。例えばインドの浄・不浄であるとか、日本社会の上・下<sup>かみ</sup>・下<sup>しも</sup>みたいなものです。3番目には言語体系です。価値体系としてのラングにおいて、ある要素の価値は他の要素との差異によって決まります。これらが通常語られる価値の種類です。この他にもあり得ると思います。

ただ、価値について、市場の話なのか、社会の話なのか、言語の話なのかということ、所与の構造のなかでばらばらに語ってはやはり駄目だと思うんです。こういうふうな構造ができたのは、もちろん近代社会の、ごく最近数百年のことのわけです。もっとずっと長い歴史において、そもそも人間はいかなる価値を求めてこうした構造をつくってきたのか、現在の構造を超えて未来をつくっていくための価値的基盤は何か、という根本的な問いに答えることが必要だと思います。その未来を創造するための価値的基盤をさまざまなタイムスケールで、もちろん数十年と考えるのもありだと思うんですけども、100年、1,000年、1万年以上でも考えるということが必要でしょう。

今、よく言われる価値創造とは、結局、市場で売れるということなわけです。ニーズを掘り起こすというふうな話になってしまう。こうした価値ということばの使われ方をどうやって相対化するのかということを考える必要があると思っています。

人類史は、価値の探究の歴史です。人間は、より望ましい生を実現するべく、自己と世界に働きかけてきました。人間は自らが望ましいと思う価値を、生において実現しようとしてきたわけです。

人間が自らの潜在的な能力、キャパシティーをどこに向けて発揮するか。つまり、いかに生きるかということは人間が何を価値とするかによって決まります。逆に言えば、価値とは人間が捉えるところの自らの行為の意義ということになるわけです。つまり、価値とは生の意義であり、生とは価値の探究であるということになる。そして、この人類史において、何を探求してきたかの、非常に長い歴史があり、文化の積み重ねというものがある。この積み重ねの歴史をきちんと見ておくということが極めて大事だと思います。

そして、これは私の専門とする人類学の、人間とは何かという問いとつながります。つまり、人間は、他の動物と比べて、自らの生き方を反証的に検

討し、その在り方を変えるべく努力することができるという特徴があります。そして、どのように自らの生き方を構築するかを、ある程度つくっていく自由を人間はもっています。

この自由があるからこそ、自己と世界の変容可能性があるからこそ、私たちは価値を問わなくてはならないわけです。特に今、人新世以降、人間は地球システムのあり方さえも変容させてしまっています。そのなかで、私たちの価値、私たちがめざすこと、どういう自己と世界を私たちは欲しているのかということ、もう一度、根源的に考えなくてははいけません。

では、人間は何を求めてきたのか。これを非常にシンプルに言いますと、人間はやはり幸福を求めてきました。幸福こそが人間が探求する価値であったわけです。じゃあ、幸福って何なんだろう、ということをお話します。これについてはもう話し出すと切りがないので、ここでは私が研究をしているインドで言うところの「人生の目的」(puruṣārtha)を紹介します。

インドでは、人生の目的には4つあるといいます。1つ目は快樂 (kāma) です。身体的な快樂。そして、2番目には富と権力 (artha)。3番目には法と正義、ダルマ (dharma)。4番目が、それらの三つを一切超えた真理を知ること、モークシャ (mokṣa)、解脱です。

このインドのスケールで話をしますと、近代世界は、結局、一番目と二番目の、快樂そして富と権力を追い求めてきただけに過ぎないと言えると思います。三番目の法と正義については、それぞれ人は自由に自分の思うところを追い求めたらいい、それができる制度を作ろうという形で、いわゆるリベラルな正義についてはある程度語ったけれども、共通善については、ほぼ議論がなかった。今日、その話が出るということで、次のご報告も大変楽しみにしております。ただやはり、議論の端緒に付いたばかりと言えるでしょう。



田辺明生氏

そして、四番目の真理と一つになる、真理を知ることについては、近代では、もうほぼ誰も言わないという状況になっていると思います。ところが、この真理や存在について考えずに法や正義を語るというのは、本来はあり得ないことです。ところが、今の公共領域において、この真理とは、存在とは何かという問いは、思想・哲学のごく狭い領域で語られるに過ぎません。真理の探求が、世界がどうあるべきかという問題とほぼ一切関わってこないというのが極めて大きな問題だと思っています。

三つめとして、価値と数量化の問題について、少しお話をしておきたいと思います。人間の尊厳、生命の尊厳、あるいは自然の尊厳ということさえよく言われているんですが、率直に言って今の議論は非常に浮ついていると思うんです。尊厳ということを考えるならば、やはりそれはすべての存在者がかけがえのない独自性を有するというを真剣に考えなければいけないわけです。

あらゆる存在者は無限に多くの原因、条件の中で、連鎖の網、仏教的に言うところの縁ですけれども、そうした中で、つまり、宇宙全体とつながりながら独自の位置を占めています。一つの存在者は、宇宙全体とつながると同時に、固有の立場を持つ。人間の尊厳、生命の尊厳、自然の尊厳は、こうした宇宙的な連鎖の中で独自性を持つということに立脚します。

ところが、数量化というのは何をするかというと、物を全て置換可能とするわけです。ある一つのカテゴリーの中にある物は置換可能である。なるほど富や権力は計算されうるし、重量や長さなども測ることが可能でしょう。富や権力また重量や長さについて、あるカテゴリーを設定した上で、また数えるための基準を設定した上で数量化する。数量化とモデル化はもちろんひとつの知の様式として重要です。こうしたやりかたは、モデルをつくって管理と統御をするということのためには役立ちます。ただし、ある一つのモデルというものは限定された目的のための、限定された視角からのモデルであり、それをいかに用いるか、いかなる価値を認めるかということについては、他のものとの関係において、位置づけられなければなりません。モデルとモデルの間の関係を考えるということは、さまざまな目的や価値のあいだの軽重をどのように考えるかということです。どういうデータを何と比較して、何を重要だと考えるのかというのは、科学だけの問題ではなくて、政治と哲学の問題であるはずなんですけれども、これについても、ほぼ一切公共

的な議論がない。これが大きな問題だと考えています。さらに、数量化され得ない、置換され得ない、それぞれの存在者のかげがえのない価値があることも忘れてはなりません。

四つめには、今日の座談会の趣旨文でコモンズという考え方に触れられていましたので、これについても少しお話をしたいと思います。まず、人間生存や人間開発にとって必要な自然環境および物的・制度的インフラを、オープンアクセスできる共有のもの、つまりコモンズとしてつくっていくことには賛成です。これはもう、ほぼみんなが賛成することだと思うんです。

しかし、じゃあ、実際にどういうものをつくるのか、何にまず手を付けるのか、さまざまなインフラのどういうものをつくり、環境の何を守って何を発展させるのか。それらについて考えるには、大きな価値的基盤が必要なわけです。資源には限度があります。限られた資源をどこに向け、誰のためのいかなる環境・インフラを構築するのか、これを集団的に決定していくためには、その決定の基盤となる価値がないと駄目なわけです。

本来はこうした問いについて熟議し決定するのは政治のはずですけれども、今の政治はそういうことになっていない。人々の声に合わせますといった形で、非常に不安定で信頼の置けないような、いわゆるポピュリズムに動かされるようになってしまっている。これに抗するのが大学の任務であると私自身は考えています。

コロナ禍で明らかになったように、現在の政治は数量化された個体集合をできるだけ生かそうとするだけです。その生存を通じて人類が何を実現しようとしているのかについては、一切問われない。そして、この生存を守るために、例えば、あらゆる祖先供養といったものや、宗教的儀礼というのは、感染を防ぐためにということで全部禁止される。私たちは、じゃあ、何のために生きているのかということが問われないままで、ただ、今の生きている者たちを守るということしか考えない。つまり、生存の価値、何のために生きているのか、いかに生きるべきかという問いは、ただ生き延びることだけをよしとするなかで抑圧されるわけです。

そして、コモンズという考え方においては、生きる環境がモノ化・数量化される傾向があります。例えば、地球は「人類の共有財産」であるという言い方がしばしばあるわけなんですけれども、これは人類を所有主体とし、他生命を含む地球環境を客体・モノとするような人間中心主義に他なりません。



ん。そして地球環境についての数量化されたモデルが、その価値的な位置付けを十分に問われないままに、科学の名のもとに政治化されているという現状があります。

インドでは、地球はダリトリー (dharitrī) あるいはダルニー (dharṇī) と呼ばれます。これは「支えるもの」というふうな意味です。ダルマと同じ語根のドリ (dhr) の派生語です。地球のほうがわれわれを支えてくれるのです。その逆ではありません。人類が地球環境を管理するというような考え方は、私にとって非常に傲慢なものだと思われれます。むしろ、人間は地球に支えられながら、環境と共に、自らの生き方をつくってきたのだし、これからもつくっていくのだということを忘れてはならないでしょう。人間と環境は切り離すことができません。「人間-環境」は一つのセットとしてつくられてきたのです。人間・生命・自然の尊厳を見つめ直す必要があります。

五つめです。じゃあ、現代の危機を超え、新たな地球社会を想像・創造するためには、どういう知が必要なのでしょう。やはり、生の価値そのものを問い直すような知が必要です。そして、これができるのはやはり大学だと思います。これは何かを効率的に達成するための目的合理性に従属する知ではありません。技術知や概念知ではなく、生き方そのものを再想像・創造する実践知と言われるようなものだと思うんです。そして、すぐれた実践知を身に付けるためには、やはり大学のコミュニティーで会い、お互いに生身の体で接して触発し合うことが望ましいでしょう。それを通じて、自らの身心と世界のつながりを知り、そしてそのオルタナティブな可能性を発見していくということです。こうした実践的な訓練を通じて、自己と世界についての気づきを高めることです。

そして、最終的には、やはり真理ということが決定的に大事だと思います。一なる真理のさまざまな表れとして、この世の多なるものをみるにはじめて、不完全であらざるを得ないこの世界の多様な存在者に真理と美を認め、自己と世界を肯定することができるでしょう。自己と世界を肯定することがいかに可能かというこの問いこそが、これまでの人間の文化の探求を動かしてきたと思います。

最後にくりかえし申しあげたいのは、現代世界の問題はやはり価値喪失にあるということです。現在の人間は、快樂と富・権力以外の価値を知らないのではないか。持続的発展というのは、結局、快樂と富・権力をこのまま

ずっと楽しみたいということだけなんじゃないか。そして、そのために世界を数量化・モデル化して管理し、そのシステムに人間を従属させている。これは人間疎外を強めるだけではないでしょうか。ただ生存することだけが、あらゆることに優先される「生残主義」がここにはあります。今の世界では、価値が問われないうまま、ただ生き残るためだけに、他の人に感染させないようにこうしなさいと生き方を制限され、あらゆる資源配分がいわゆる持続的発展の下に統御されている、というのが私の感じるところです。

もし「いや、そうではない」、「もっと大きな未来を見つめている」と言うのならば、やはり、単なる生存を超えた人間の価値というものが問われなければならないんじゃないか。しかし、そうした本来の知的探求の営みは、大学を含めて公共領域から周縁化されているというふうには言わざるを得ないと思います。

人間は生の意義を探求するなかで、自らの生を構築し、環境と共に変容する潜在的可能性を有しています。このように私は人間を捉えます。人間を価値化するということは、まさにこの人間の潜在的可能性を活かすことに他ならないわけです。人間の潜在的可能性をいかに最も活かせるのかということ、を、まず優先して考えるということがこれからの社会にとって必要なのではないかと考えております。以上です。ありがとうございました。

**中島** 田辺先生、ありがとうございました。核になるのは、真理ですね。真理を追究していくことが周縁化されてしまっていて、それが結果的に人間の価値を問うこと自体を周縁化している。これは非常に深刻なことだと思います。大学という場所は、やはり真理追究ということをお忘れてはいけないうけです。改めて大学という場所に関しても考えさせられました。

持続可能性という言葉、あるいは持続的発展、これ自体もいろんな問題を抱えている言葉です。持続不可能性というふうには表現する人も出てきているほどです。今の人間中心主義的なシステムのあり方だと持たないわけです。人間も持たないし、地球も持たない。そういう中で、人間のあり方を根本的に考え直していくことというのが必要になってくるかと思ひます。

あとは総合討論で戻りたいと思ひます。ありがとうございました。

**田辺** ありがとうございました。

## 発表 2 経済学と価値 野原慎司

中島 では、続きまして野原先生、お願いいたします。

野原 ありがとうございます。それでは始めさせていただきます。経済学研究科の准教授をしております野原と申します。専門はアダム経済学史、経済学の歴史を通じて研究することで、それを通じて市場とは何かとか、資本主義は何かという問題を考えるということが私のテーマです。より具体的にはアダム・スミスをテーマにしまして、スミスは18世紀の啓蒙主義者です。啓蒙主義の研究もしています。

プラスして、アダム・スミスや啓蒙主義、経済学の知識が日本にどう広まったのか、東アジア地域にどう広まったのかという研究もしています。それは知の受容です。知の受容というのは単に受容するだけではなくて、そこにやっぱり日本の資本主義をどう理解するか、それに生かそうという問題になったわけです。そういった問題を含めて研究しています。

経済学では、価値というものは繰り返し議論されており、基本中の基本なんです。価値の前に人間の話をしますけれども、経済学では基本的に個人というのは商品やサービスの売り手や買い手として表れます。もちろん商品やサービスの売買は古代から行われていて、経済学が発達する前にもいろんな形で記述されていました。古代からいろんなものに商品やサービスを売買する場面が著述されています。

しかし、17世紀、18世紀に入って初めて経済学というものが発展して、その中で商品やサービスの売り手や買い手としての個人に焦点が集まります。そういった近代への人間理解です。経済学が発達するのは、近代の人間理解と手を携えております。それは商品やサービスの売り手や買い手として個人が考えられるわけです。それが他の場面から切り離されているというのが、近代に独特なんです。

中世では、商品の売買というのは道徳や神学と関連するものとして現れました。つまり、商品やサービスを売買する個人というのが、その局面だけが切り出されることはなく、それが宗教や道徳の下で論じられる傾向にあったわけです。

もちろん、その中でもいろいろな経済学の議論があって、シュンペーターとかいろんな人はその中で経済学の議論があることになって、それを取り出して議論する場合もあるんですけども、そういうときは恣意的な取り出し方で、どういう場面で議論されていたかに着目すると、やっぱり道徳や宗教、特にキリスト教、ヨーロッパ伝統の場合は神学です。

その伝統の中で商品の売買が議論されて、そういう商品というのは売買によって、要するに価値が売買されるわけです。だから、価値というものは、実は近代に入ってから商品と結び付けて議論されますが、それ以前にもすでに議論されていたんです。それはしかし、道徳や宗教との関連で議論されていて、しかも中世の場合は公正な取引とは何かということが繰り返し問題となってきました。

中世のトマス・アクィナスという人が例えば典型的なんですけれども、正しい価格とは何かということなんです。商品というのは何らの価値も付け加えないまま、値段だけ上げて転売するならば、それは不当な販売と捉えられました。つまり、商品が、誰かが値段だけを上げて、何も価値を付け加えないまま販売する。それは不当である。正しい取引とは何か。要するに、買うから許される取引は何なのかということの問題にしたんです。

要するに、キリスト教の伝統の中では、他人を利用して金もうけすることは道徳的に正しくないことと捉えられていました。つまりこれは、他人を利用することで、他人にいいことをするんじゃなくて、自分のことを優先するということで、キリスト教徒の隣人愛の発想からすると、それは神への愛に目覚めた者は隣人愛の行いに反するということになります。そういうことで信仰に目覚めない人間は、要するに自己への愛に生きる。それで、自己への愛に生きる者が自分のために金もうけをするというふうに考えたわけです。

ところが、中世といえ、やっぱり商品や市場はそれなりに発達していますので、現実にもそういった売買が全然行われないうちは社会は成り立ちません。だから、許される取引とは何かということが、実は繰り返し議論されたんです。その中で、トマス・アクィナスが考えたのは、価値どおりの販売は正当な販売であるということです。商品の価値に沿った販売が正当な販売で、その商品の価値というのは、要するにその人が手を付け加えたこと、その人が付加価値を付け加えたこと、つまり労働価値、労働による付加価値という発想が出てくるわけです。

トマス・アクィナスはこういう議論をしているわけですが、そういう中世の議論というのは、その後見捨てられることにはなる。ただ、この正しい価値、正当な価格や価値は何か、こういうことを発想するというのは、実は近代に入ってからずっと持続するんです。

例えば、マルクスは、労働価値、労働によって商品の価値はつくられる。しかし、価値が正当に労働者のものではなくて、資本家に奪われるということを問題にしているわけです。つまり、価値が正当なものに帰属しないということをマルクスは発想している。

その発想はやっぱり中世にまでさかのぼるんです。つまり、正しい価値、誰が価値を手にするのが正当なのか。このことは、あるいは正しい価値とは何か。こういったことは近代に入っても問題とされ、その背景にはアクィナスのような問題があって、つまりキリスト教的伝統では価値とは何か、商品の価値とは何かということが非常に大きな意味を持ってくる。こういった伝統は、トマス・アクィナスの時代が典型的でしたが、それ以外にも中世では神学者が価値を議論するということが度々行われたわけです。

ただ、商品の販売を道徳や宗教から切り離して捉える発想が広がったのは、17世紀の重商主義以降のことなんです。重商主義というのは、17世紀から18世紀にかけて経済学が勃興するきっかけとなったもののことです。しかし経済学はまだ独立した学問となっていないんです。その時々々の政治や社会の出来事を論じる一環として経済が論じられる傾向がありました。経済は、とりわけ政治との関連で論じられました。最も国を豊かにする政策はどのようなものが課題となり、その中で、その政策を理解する背景にあるものとして経済の理解が進んだのです。

つまり、ゾーンポリティコーンといいますか、つまり政治体の中の個人として、政治体に貢献するものとしての一環として経済が捉えられ、しかし、そして個人の価値、商品の価値というものも、そういった政治体に貢献し得るかどうかということで、あるいは人間の価値というものも、そういった商品の価値を、政治体の価値を増やすことはどれだけできるのかということが問題となったわけです。政治に貢献することが人間の価値と考えられた、そういった時代であったということです。

それが変更するのはアダム・スミスの時代です。アダム・スミスや古典派経済学以降、もはや政治に貢献することが直接の目的ではありませんで、経

済の独自のメカニズムを理解することが課題とされました。つまり、五神先生の話に出てきました市場メカニズムです。市場というものは、商品が売買される場です。商品の売買について需要と供給が変化し、価格が変化します。そういった形で市場は自動的に動く。政治家とか特定の人が入り込んでも市場というのは自由に、自律的に運動する。つまり経済というのは自律的に運動するんだということが発見されたのは、やっぱりアダム・スミス以降のことなんです。それは今、個人は利益を追求する個人ということが前提になるんです。



野原慎司氏

しかし、それは価値という観点からいうと、経済学においては労働による価値創造ということが、一国の富を形成する源泉、つまり、商品の価値というものは労働によってつくられるんです。だから、労働というものを通じて商品の付加価値が製造されます。だから物を作るということです。生産という行為を通じて商品の価値は形成される。これは言い方を変えれば、ホモファブリカス、作る人としての個人ということがあるわけです。欲望の追求を無限に肯定するのが資本主義なわけですけども、中世では、当然神の下の個人ですから、それは非常に制限されていた。重商主義の下では、政治に貢献するという前提の下で欲望の追求が肯定されたわけです。

アダム・スミス以降、個人の欲望追求というのは商品の売買に結実します。それは、労働による価値創造です。つまり、欲望というのは労働と結び付けられる。労働による価値創造があるから、欲望の追求が肯定される。そういうふうにして、価値を創造するということは労働によってつくられる。だからこそ、物としての欲望が肯定されるということになってくるわけです。こういったことが、18世紀以降に起こっていたわけです。

ところが、1860年代になると、変換が起きます。経済学に「限界革命」が起り、要するに労働価値説を放棄するんです。著名な経済学者が3人現

れて、それがほぼ同時期に偶然、経済学に革命をもたらします。労働価値説を放棄して、個々人の主観的効用を商品の価値の源泉とする理論が登場しました。

これはどういうことかという、限界効用の採用ということです。つまり、これにより経済の既存の商品のストック量により効用が変化します。どういうことかという、例えば一つもリンゴを持っていない段階で、1つ目のリンゴを持つとすると、それは非常に満足度が高い。ところが、10個リンゴを持っているのに11個目のリンゴを買うとすると、満足度が低くなる。それよりもはるかに低くなるという形で、個人の満足度というものは、どれぐらいその商品を持っているかによって変化すると。だから、個人の主観的な満足度というのは、そういったいろんな条件で変化します。それが、実は商品の価値の源泉になっている。

つまりこれは、労働価値説というものは、生産側、生産という現場で価値がつくられたみたいになるんですが、1860年代以降は、消費というものにおいて価値がつくられるんだというふうに見ているわけです。これは労働から消費への注目点の変化があったからです。これは恐らく、産業革命の進展によると思います。産業革命の前までは、人類は圧倒的に物不足の時代です。だから、物を作るということは、それ自体に非常に価値があったわけです。ところが、産業革命によって物があふれる社会になってくると、物を作ったからといって必ず売れるとは限らない。むしろ、消費者の側に主権があって、消費者の側が物を買う。どれを買うか選べる。消費者が商品の価値を決定付けるような社会になったわけです。こういった形の変化があって、個人の満足、効用というものの追求が重要になってくる。

資本主義社会では個人の満足、効用が追求されるものとされました。ミスは労働を媒介とせずに、欲望それ自体、個人の満足それ自体を肯定しました。その欲望の追求というのは、欲望が商品化されるわけです。人間活動を価値化する、つまり欲望というのは商品になるわけです。それは、商品というものを通じて人間の活動が価値になっていく。その人間の活動の価値化というものが、資本主義の原動力となってくるわけです。これが資本主義というものが非常に発達した理由なんです。

つまり欲望というのは商品というものとなる。欲望を無限に肯定するということは、商品を、購入を無限に追求することを肯定する。だから次から次

へといろんな商品が出てくる。それをどんどん買い求める。それを肯定するということが資本主義の原動力、つまり個人の欲望を肯定する。これは近代以前の社会では、多かれ少なかれ欲望というのは否定的に捉えられていたわけで、欲望を非常に認めるというところに資本主義の大きな特色があるわけです。

ところが近年になると、これが非常に限界が出てくる。満足の追求が飽和状態になってきているんです。実際、まだ需要不足、つまり物はどんどん作ると思ったくらいでも作れるんだけれども、実際はそれほど売れないという状態が日本のみならず、世界各国で見られるようになってきた。これは長期停滞と言われていて、特に2010年代以降、経済が非常に思ったほどには成長しないという状態が起きてきました。

この原因となるのは、もちろん欲望が飽和状態で、みんな、欲しいものがないということもあるんですけども、他方では、情報通信産業とかAIの発達というのがあって、要するに個人が非常にお金とか商品というよりも、いろんな無形である情報、データというものに価値を見いだすようになってきた。それは表面上無償のものであったりするわけです。そういったデータとか情報、データの中にはいろんな動画配信サービスも含まれますけれども、そういった無償であったり低額であったりするような、そういった情報、データがますます価値を持つようになって、必ずしも金銭化されていない。だからGDP上では表れないんだけど、そういった情報とかが価値を持つようになってきた社会になってきた。

ところが問題があるわけです。こういった個人の満足の追求というものは、アダム・スミスによれば相互の信頼によって成り立つ。相互に社会のルールを守る、相互に相手のことを信頼する。つまり、商品を買ったら、商品を買う相手はちゃんと自分が思うどおりの物を買ってくれるという信頼感、あるいは自分を傷つけたりすることはないという信頼感。そういうふうにして、実はこの資本主義における個人の満足の追求というのは、相互に社会のルールを守ったり、信頼をすることによって成り立っているんです。

あるいは、別の面から見ますと、環境問題もそうです。個人の満足の追求は環境が守られるということが前提となっている。あるいは、道路や情報インフラの形でインフラがあるということが前提となっている。

ところが、GAF Aに見られるように、情報が一方的に収集され、そして



一部の国家に見られるような、情報が収集によって個人の行動を操作するようなことが出てきた。これはこの前提を突き崩すんです。つまり、相互に信頼することじゃないわけです。一方的に個人を管理する状態になってきた。こういった状態になってくると、一体、相互の信頼を取り戻すにはどうすればいいか。こういった個人の満足の追求の前提にある相互の信頼、あるいは環境を守ったり、インフラを整えたりすること、そういったことをどう議論するかということが重要になってくるわけです。

それをしないと、一方的に個人は満足を追求しているんだけど、それが一方的に特定の企業とか国に情報が集まってしまう。そうしたら、企業が個人の行動を非常にうまく操作するようになってきてしまいかねません。個人の場合では、自分が好きなことをしているつもりであっても、それは結果として特定の企業や国家に操作されるということになってしまいます。つまり、そういった形で相互の信頼があって成り立っているような状況が崩れてしまうような現状にあるわけです。

だから、こういった相互の信頼、共有された信頼というものをどう取り戻すかということを議論する必要があるわけです。あるいは、企業や個人はどこまで情報を収集していいのか、情報をどこまで利用していいのかということを、もう少し企業や国家に出してもらって、きちんとそれを議論していく必要があります。

単に、これは消極的な意味合いを持つだけではないんです。諸個人が共有できる満足、五神先生がおっしゃったように、諸個人が共有できるような世の中の社会の善というものがあるわけで、そういったものも満足です。これは宇沢弘文先生がおっしゃった社会的共通資本とも言えるんですけども、そういった諸個人が共有できる満足、すなわち個人の満身に収まらない、みんながシェアできるような満足ということを追求することによって、新しい社会の価値形成がもたらされる。そういった可能性があるし、現にそう進んでいるわけです。

現に、いろんな情報というのは、もちろん一方的に企業や国家が集積するようなこともあり得るわけですが、情報は本来他人と共有できるものなんです。それはお金との最大の違いです。貨幣だって共有しようと思ったらできないかもしれないけれども、貨幣はやっぱり共有は難しい。情報は本来共有可能なものなんです。つまり、何を共有財産にするかということ

を、きちんと議論しておくことを通じて、そういった共有したデータとか情報を基に新たな価値創造をする。こういったことが可能だと私は思うんです。

その場合の共有される満足、共有されるものには環境であったりとか、データであったり、知識だったりします。学問は本来共有するものです。学問的成果というのは、誰かの個人が独占するものではなくて、共有するものなんです。それが中世との大きな違いで、中世にはやっぱり特定の知識人、中世の教会や大学や修道院の聖職者や学者などが知識を独占していました。それが18世紀の啓蒙の時代に知識を広く公開して、人々が共有するという状態が生まれたんです。それが実は産業革命につながりました。知識の共有が産業革命につながったのです。

同じようにして、新たに諸個人が、今は一部の企業や国家に集積されているデータとか情報を共有することを通じて、新しい価値形成がもたらされる可能性があるとは私は考えています。これでおしまいです。ありがとうございました。

**中島** 野原先生、ありがとうございました。人間のさまざまなあり方に応じて、価値の形も変わってくるわけです。神学的な規定、政治的な規定、あるいは労働、消費、情報。こういったものに規定された人間のあり方に応じて、価値がそれぞれ対応してくるわけですね。そして、今日のデータの問題を非常に深く掘り下げていただきました。人間のあり方が共有とか、あるいは共生とか、そういったあり方をすることによって、新しい価値創造ができるのではないかということではないかと思いました。どうもありがとうございました。

### 発表3 仏教のコモンズと人間の価値化 柳 幹康

柳 東洋文化研究所の柳幹康と申します。今回の座談会で話しする機会をいただき、たいへん光栄に存じております。

今回の座談会のテーマ「人間を価値化する」、および趣旨文に「コモンズ」とあるのを拝見した際、仏教を研究している自分が思い浮かべたのが、仏教において人間のあるべき価値がどのように実現されていたのか、および仏教で「コモンズ」に相当するのは「サンガ」と呼ばれる教団ではないか、ということでした。そこで「仏教のコモンズと人間の価値化」と題し、拙い話ではございますが、私なりに考えたことを申し上げたいと思います。

これから申し上げる内容は大きく4つです。まず最初に(1) 仏教の「コモンズ」としての「サンガ」について話ししたうえで、(2) そこで人間の「価値化」がなされ、それにより「サンガ」が維持されてきたという相補的な関係を紹介し、(3) その背後にある世界観に言及したのち、(4) ひとつの問題提起をしたいと考えております。

#### (1) 仏教の「コモンズ」

仏教では最も大切にすべきものとして「三宝」(三つの宝)、すなわち仏・法・僧を挙げます。仏とは悟った者、法とは仏が説いた教え、僧とは仏のもとに集った出家者の教団・共同体を指します。この教団・共同体を「サンガ」といい、その原義は「集団」で、「僧伽」(そうぎゃ)と漢訳し、一字で「僧」と申します。具体的に言うと「サンガ」は、特定の領域を区切り、そこにいる4人以上の出家者によって構成されます。その形態は、地域・時代により形を変え、場合によっては消失することもありましたが、2500年の時を超え今日もなお存在しています。

「サンガ」は非常にユニークな存在で、そこでは基本的に生産活動は行われません。人員も食も財産も、みな外から補給されます。出家者は性行為を行いませんので、そのなかで子供は生まれませんから、構成員はみな外からやってきた人ばかりです。出家者は自分で畑を耕すことはなく、日々の糧は托鉢により外部から得ます。そして財産も外からの寄付に頼っております。

教団において、「布薩」と呼ばれる月に2回の集会が行なわれ、そこで自身の罪を振り返り、その罪状に応じて教団追放から自身での反省まで各種の罰則が科されます。このような自浄作用により共同体の質を保持するわけです。

また、構成員である出家者の所有は非常に限定されていました。所有が認められたのは、古くは、衣や鉢・敷物など必要最低限の六種の物のみであり、後には所有可能な範囲が広がったものの、それでも私有財産は基本的に制限されていました。たとえば外部から寄付された土地や建造物などは、原則サンガ、すなわち教団の所有物となります。

なお、このような実際に運営されるサンガを「現前サンガ」と呼ぶのに対し、空間・時間に限定されない仏教全体の理念的な共同体を「四方サンガ」と呼びます。地域、時代ごとに無数の「現前サンガ」が運営され、それらがみな「四方サンガ」に統合される形で、仏教世界が構築されていたことになります。以上が第一部、仏教の「コモنز」としてのサンガの話になります。

## (2) 人間の「価値化」とサンガの維持

続きまして、サンガにおいて為される人間の「価値化」と、それによるサンガの維持について見て参ります。「価値化」という言葉をどう理解するかということ自体、たいへん難しい問題だとは思いますが、ここではひとまず、「価値が明確でないものに対して、一定の基準に従いその価値を判断、もしくは価値を見いだすこと」として、話をさせていただきます。

さて、仏教において、人間はどのように「価値化」されてきたのでしょうか。これも様々な意見があるところだと思いますが、私なりに考えますに、その重要な例として以下の三つを挙げられると思います。

第一が、「自分自身の価値を見いだすこと」です。これは「自利」に当たり、仏教に帰依した者が修行によって新しい知見を得て、苦しみを克服することを指します。これにより、それまで得られていなかった新たな価値を自らの身の上に実現するわけです。

第二が、「他の人の価値を見いだすこと」です。これは「利他」に当たり、ややもすれば自分を優先するあまり軽視しがちな他者に対し、慈しみの眼差しを向け、その苦しみを除き楽を与えることを指します。いわゆる「慈悲」

ですね。

第三が、「他の人の価値を判断すること」です。これは「授記」と言われるもので、悟りを開き一切知者となった仏が修行者に対し、「汝は将来こういう存在になるであろう」と予言し、保証することを指します。

このうち最後の「授記」は、超越者である仏の領分となり、現実的には想定が難しい話になりますので、これはひとまず措き、「自利」と「利他」について見ます。一口に仏教と言っても、様々な立場があるのですが、ここでは初期の仏教と、紀元前後に起こった大乘仏教を取り上げ、「自利」と「利他」が密接な関係にあったことを申し上げたいと思います。

初期仏教において出家者の「自利」、すなわちサンガにおける修行は、仏教の開祖である釈尊が説いた「四聖諦<sup>ししやうたい</sup>」を聞き、想起・観察することが基本となります。「四聖諦」とは、聖人にとっての四つの「事実」の意で、それを繰り返し修習することで、仏教的な価値観を内面化し、仏と同じように世界を「正しく」見る知見を得るわけです。

この「自利」の道は「利他」の側面も有するものでした。インドでは、修行者や貧民・旅行者などに布施することで福德が得られるという考えが古くからあり、仏教もそれを承けて仏やその弟子、および彼らが構成するサンガなどが福田（幸福を育てる田地）とされました。これは仏教的な価値観を前提とする話ではありますが、人々は出家者・サンガという福田に布施という種を植えることで、自らの幸福という収穫を得ることができたわけです。この点から見れば、出家者が自ら修行に勤しむことは、単なる自利のみならず、福田として他者に福德を与える利他の面も兼ね備えていたといえます。

のちに興起した大乘仏教でも「自利」と「利他」は密接な関係にありました。大乘仏教は従来の仏教を小乗（自身の救済のみを求める劣小な乗り物）と批判し、生きとし生けるもの全てを救済する偉大な乗り物を自任する立場で、とりわけ「利他」を強調します。ただし「利他」のためには、「自利」の面、すなわち自身の修行が欠かせません。「自利」なくして「利他」はなく、「利他」がなければ「小乗」に墮してしまう、ということで、「自利」と「利他」がともに必要とされます。（もちろん、「小乗」というレッテルを貼られた側からすれば、先ほど申し上げたように、自身が福田となること、あるいは仏教を正しく伝えることで「利他」を行なっているという反論があると思いますが、大乘としてはこのようなスタンスに立つわけです。）

話が雑駁になってしまいました  
が、大きくまとめますと初期仏教に  
せよ大乘仏教にせよ、「迷」から  
「悟」への移行、仏教的な価値を  
実現していない状態から、それ  
を実現した状態への移行が  
目指されており、その過程で  
「自利」と「利他」の双方が  
具わり、自己にとっても他者  
にとっても望ましい存在となる  
ことが期待されているわけです。  
その実践が為される場がサンガ  
であり、そこに所属する出家者  
は必要最低限の物のみを所有  
して、実践に励むと



柳 幹康氏

ともに外部の人々を感化していく。一方、それに感化された外部の人々は、布施をしたり出家したりと、物質的にも人的にもサンガを支えていく。このようにサンガにおいて人間の価値化が為され、それによりサンガが維持される形で、仏教は2500年にわたり脈々と続いてきたわけです。

### (3) その背後にある世界観

次に、仏教の前提となっている世界観について申し述べたいと思います。仏教はインドから各地に伝わり、実に多様な展開を遂げますが、その教えの前提となっていたのが輪廻——およそ命ある者はみな、死んでは生まれ、生まれては死に、生と死を永遠に繰り返す——という世界観です。生死を繰り返す苦しみの世界から脱しようというのが、仏教の出発点でした。

さきほどご紹介したサンガの規則にせよ、自利や利他にせよ、また出家者向けの深い教えにせよ在家者向けの浅い教えにせよ、仏教の考え方の多くが輪廻の考えと関連しています。

例えば出家していない在家の者に対して、輪廻における因果応報がしばしば説かれます。善・悪の行為の結果は、たとえ今生で芽吹かないにせよ、来世以降で必ず我が身に返ってくるといいます。己が為した行為の責任から逃れることができないと諦観することで、一挙手一投足を忽せにせず、悪を離れ善を行なうわけです。

また、自利にせよ利他にせよ仏教で追求される究極的な利益とは、金銭や幸福など世俗的なものではなく、輪廻から脱することに他なりません。輪廻の世界にとどまる限り、生と死を永遠に繰り返し、それにともなう苦から逃れられないからです。

サンガに所属する出家者の所有が制限されるのは、欲望を抑止するためですが、そもそも欲望が問題視されるのも、それが輪廻の生存を駆動する原動力だと考えられていたからです。私有財産の禁止は単なるサンガ維持のためのルールではなく、他ならぬ自身の解脱という究極の目的に関わるものだったのです。

このように仏教は、輪廻という世界観を引き受けることによって、ごまかしようのないリアリティをもって響き、それまでの生き方を改め、新たな価値を実現するよう迫ってくる形になっているわけです。

なお仏教本来の文脈からずれるかもしれませんが、輪廻によりサンガというコモنزの悲劇も避けられるように思います。コモنزの規模が大きくなると、それに関わる人々の責任感がなくなり悲劇になるというご指摘が先ほどありましたが、今生だけでなく来世以降も仏教徒としてサンガに関わり続けていくと思い定めるのであれば、当事者意識が芽生えサンガの維持に努めるでしょうから。

#### (4) 問題提起

最後にひとつの問題提起をしたいと思います。今日のわれわれの目から見れば、この輪廻という話は恐らく多くの人にとって共有しがたい一種の夢物語に感じられると思います。ただ、それに代わり得る、自他をともに利する形で新たな価値を創出する物語をわれわれは持ち得ているのでしょうか。

昨今、持続可能性が議論されるようになった背景に、グローバルな範囲での環境破壊や貧富の格差拡大があることは趣意文に指摘される通りです。そして、このような問題、およびコモنزの悲劇である収奪・枯渇などの惨劇の背後に、個人・集団の暴走した欲望があることも、言わずもがなのことです。

もちろん欲望だけに問題を集約するのではなく、管理や分配など個々具体的な制度設計も重要であることは言うまでもありません。とはいえ、「ルールに反しなければよい」どころか「ルールを破ろうとも見つからなければ、

ごまかせれば、捕まりさえしなければよい」というような困った方々を目にすることが少なくない今日において、問題の根幹である欲望をどう御するのかについて、改めて考えてみる必要があるのではないかと思います。

仏教の輪廻は、それを信じる者にとって、今生だけでなく未来永劫にわたり自己の行為の責任を一切の例外なく引き受ける覚悟の根拠となっていました。それにより敬虔な仏教徒は、人目の有無に拘わらず、死に臨んでさえ、欲望に振り回されることなく、仏教的な価値を体現しえたわけです。振り返って今日の我々を見るに、そのような強固な指針となる物語を持ち得ているかどうか。恐らくいま社会に瀰漫している「富を最大化することが幸福である」等の欲望を前提とした物語には、限界があるように思われます。

以上が事前に考えていた内容なのですが、本日の座談会から啓発を受け、新たに考えたことがあるため、最後にそれを申し上げたいと思います。

五神先生のお話をお聞きして気づいたのが、物語という出発点のほかに、行動の向かう対照を変えるということも重要だということでした。五神先生のお話では、200億という規模の大学債を発行することで、新たな市場を創出し、そこから社会を変えていくとございました。現在の資本主義の枠組みのなかで、新たな投資の対象を創出し、そこから我々の乗っかっている枠組みそのものをも変革していこうというお話をお聞きし、仏教の「方便」という言葉を思い出した次第です。

「方便」とは人々を導くための手段の意です。現在の見方Aから別の見方Bへの転換を促す際に、現段階ではBの理屈が分からないため、ひとまずAの文脈で理解できる形にして示し、その実践を通じてBの見方を獲得させることをいいます。

先ほどの問題提起では、根幹となる物語に焦点を当てていましたが、現在の物語の文脈に沿って新たな志向の対象を創出し、そこで活動することでやがて、前提となっていた物語そのものの転換を果たす、という道もあると気づいた次第です。利潤を追求する市場経済のなかで、それだけに還元されない魅力のある投資先を創出することで、持続可能な新たな市場経済の形を作っていくように、欲望を前提とした物語において、その欲望をうまく誘導しながら、それに振り回されず自利・利他がうまく循環していくような新たな物語を紡ぎ出すことも可能なのかもしれませんが。

要領の得ない話になってしまい申し訳ありません。私からは以上です。



**中島** 柳先生、ありがとうございます。柳さんが関わっているのは、特に禅仏教です。何か禅というと、どちらかというと自分の力でというふうに思いがちなのですが、サンガというあり方を非常に大事にしているということ、私は曹洞宗のあるご住職から繰り返し聞いたことがあります。

それもやはり4人以上なんですよ。サンガは、今風の言葉で言うとアソシエーションだと思うわけです。しかも、それは所有、あるいは所有への欲望、この両方を離れたアソシエーションの可能性を指し示しているわけです。それは、もちろん外部にある仕方で依存しているわけですが、でもその外部の在家と言われているものも、このサンガのあり方を見て、自分たちのあり方自体を絶えずチェックする、反省する。そういった機能があるかと思うわけです。

柳さんが強調されていたなかで、重要なのは物語の問題です。ギリシャ語でヒストリアというふうに言うんですけども、納富信留先生の解釈によると、このヒストリアというのは単なる物語とか歴史とかではなくて、探求という意味だというふうにおっしゃるわけです。やはり、物語るといのは、言葉を通じて、何かを共に探求していくような側面があるのかなと思います。

輪廻というのも一つの探求の言葉なわけです。それ自体が、今、私たちにそのままどう迫るのかというのは分からないところがありますけれども、しかしやっぱり探求の言葉であるというふうに考えていくことによって、別の意味合いを持ってくるのではないか。それが人間の価値を、今、問うときに重要になってくるのではないか。そのように思いました。どうもありがとうございます。

それでは、最後に石井先生からお願いいたします。

## 発表4 齊物的平等と「渾沌」のメカニズム

——『莊子』齊物論の近代的解釈から考える 石井 剛

石井 今日、わたしがお話したいのは「齊物的平等」という考え方についてです。私が研究しておりました章炳麟という中国近代の哲学者がこの考え方を提出しているのが始まりです。彼は『莊子』の数ある篇章の中でも最も代表的だと言ってよい「齊物論」篇をユニークなしかたで再解釈します。というのは、仏教の理論を借りて解釈するのです。その『齊物論釈』という難解なテキストのなかで、最初に示されるのが、平等とは人間だけでなく万物にとっての平等であり、そうである以上、「不斉なるものを斉しくする」のが平等の目指すべき目標ではなく、「不斉であるが故に斉しい」ことこそが真の平等であるという考え方です。つまり今日の価値の話に引き付けると、等しく価値付けられるという意味での平等では全くないものとして平等を定義すべきだというのがこの齊物的平等の根幹にあります。それを可能にするために、章炳麟はまず言葉をまず離れる必要がある、そして、文字とか名称を離れる必要がある、さらに心の作用を離れる必要があると述べます。そういうものを全て離れたところで、初めて万物が不斉であるが故に斉であるという平等の世界が開けてくるという言うのです。

わたしたちがものごとを認識するには言語によるわけですので、価値は言語的に与えられているということになります。人間の言語——もしくはロゴスと言ってもいいかもしれませんが——によって分節化されることが価値づけの契機になっており、したがって、名指されている物とそれを名指している言語との関係を宙吊りにすることによって、物が物として現れてきます。今日の中国で活躍している思想史家の汪暉氏は、ジョン・ロールズのリベラリズムやそれと対話的な関係を持ちながらケイパビリティの概念を提出したアマルティア・センといった北米の議論とは異なる平等論として、章炳麟の齊物的平等に着目し、物を交換のロジックから切り離すことによって、もう一度、エスニック・グループや階級などによって規定される人と人の差別的関係を捉え直そうと提起しています。その議論はじゅうぶんに尽くされているとは言えないと思いますが、アイデンティティの政治が尖鋭化し、対立が激化する傾向がある中で、資本主義的な交換関係を相対化することによ

て、人間のあり方を別の視点から見なおそうとする試みは注目するに値するのではないかと、わたしは感じています。しかも、章炳麟の齊物的平等の観点に忠実である限り、たとえ汪暉氏の主な関心がアイデンティティ・ポリティクスであったとしても、それは「物」一般との関係に結びつかざるを得ません。平等の問題をつきつめて考えれば、人だけではない、あらゆる生きとし生けるもの全てに行き着くべきだというのが章炳麟の莊子解釈だからです。しかしそこで問題となるのは、「不齊だからこそ齊」であるという齊物的平等があるべき世界の理想であるとして、それはどのように現実に実現されうるのかという問題です。汪暉氏はこの問題を考えるに当たって、20世紀の歴史において果たし得なかった中国の社会主義を理想化するのですが、可能性としての中国現代史を語ることは理論的な困難をかかえていると言わざるを得ません。中国だけではなく、20世紀における社会主義の壮大な実験が人類史に如何なる傷跡を残したかについては衆目の一致するところであると言わなければなりませんから。

『莊子』齊物論において、万物の平等というイメージは、自然界のありとあらゆる物が風が立つと同時に、銘々の音（風の吹き抜ける音）を立てて鳴り響く「天籟」の世界として美しく描かれています。言語による命名行為の問題と言えば、思い出されるのは、やはり、かの有名な「渾沌（こんとん）」の寓話の方でしょう。皆さんご存じの通り、これもまた『莊子』に見られる物語ですね。

今日では、カオスという言葉が「混沌」という漢字語に訳されていますけれども、『莊子』応帝王篇では「混沌」と表記されています。ごく短い物語ですので全文を紹介します。

南海の帝を儻といい、北海の帝を忽といい、中央の帝を渾沌という。儻と忽とがあるとき渾沌のところで出会った。渾沌が心からもてなしてくれたので、儻と忽とは渾沌の恩義に報いる相談をした。「ほかの人には誰にでも七つの穴があって、それで見たり聞いたり、食べたり息をしたりしているが、あの人にはそれが無い。ひとつ穴を明けてみよう。」毎日、穴を一つずつ空けていったところ、七日目に渾沌は死んでしまった。（『莊子』応帝王、『新釈漢文大系第7巻 老子・莊子（上）』、明治書院、1966年、291-292ページ、市川安司訳）

2人の帝が、渾沌という、大変もてなし好きの帝の厚情に報いるために顔のわからない渾沌に目、鼻、口、耳の穴を毎日ひとつずつ穿っていったところ、合計七つある穴すべてが穿たれた七日目に渾沌は死んでしまったというお話です。混沌を秩序づけるというのはまさに言語の作用そのものですから、齊物的平等が立ち現れてくるのはある種の混沌状態においてだということができます。言い換えれば、原初にあったカオスをもう一回つくり出すということに



石井 剛氏

他ならないと思われま。カオスを秩序付けてしまうと、それ自体は秩序として安定するんだろけれども、新しい価値について見直す機会、また新しい価値をつくり出す機会というのが失われてしまうんだということになるのだと思います。したがって、既存の価値の体系を相対化して擬似的なカオスの場をいかにして確保するかということが問題になるでしょう。

科学史家として著名な山田慶児氏は、カオスを内に含んだ世界構造のモデルを「三極構造」として構想しています。

山田氏によれば、世界は初め、渾沌という単一の要素によって構成される一極構造でした (a)。そこへ儼と忽が加わることで三極構造が現れます (b)。これは混沌たる未分明の空間をめぐる両者の争いとなり、混沌の解消によっ

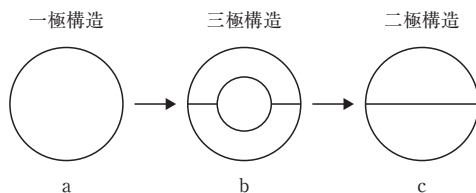


図1 渾沌神話にあらわれる空間の三つの構造

てようやく闘争が収束し、空間は二分割された二極構造となって安定を得ることになります (c)。(以上、付図も含めて、山田慶児『混沌の海へ 中国的思考の構造』、朝日新聞社、1982年、296ページ)。

今日では複雑系科学などの発展によって、カオスの存在がシステムの動態

的發展に不可欠なものであることがわかってきました。言ってみれば、三極構造のようなコスモス（秩序）とカオス（混沌）が共存することによって世界は成り立っているということができるといえるでしょう。しかし、カール・シュミットを待つまでもなく、人為的に構成される政治社会において、こうした三極構造を保つのは容易なことではありません。中国で試みられた社会主義について、山田氏はかなり好意的な評価を下していますが、「一を分けて二と為す」という二分論的な階級矛盾の政治モデルが三極構造の不安定な存立を常に揺るがし、呑み込んでいったのが「文革」を頂点とする急進主義の帰結であったことは、中国のみならず人類全体にとっても傷ましい教訓であったと思います。一方で、昨今のポピュリズムは、リベラル・デモクラティックな共和制もまた内部に構造的な問題を抱えていることを暗示しているものであるように思われます。

三極構造の中心にあるカオティックな領域は混沌とした無秩序であるが故に脆弱であり、その脆弱さは、アイロニカルなことですが、言語を駆使する人間の知性が作用すればこそもたらされるものだということです。

では、いかにしてカオス構造を社会的に確保していくのか。少なくとも今日のわたしの発言のまとめとしては、大学はカオスの場として機能すべきであり、それを社会全体で支える仕組みを持つことが重要であろうということになります。宇沢弘文は大学を社会的共通資本として理解しようとしていました。特にその中では「プライマシーの大学」が社会において果たすべき主導的な役割が強調されていましたが（宇沢弘文『社会的共通資本』）、そこからさらに一歩進めて、価値の吟味を可能にするある種の「コモンズ」として社会が大学を支えていく発想が重要ではないかというのがわたしの申したいことです。

**中島** ありがとうございます。莊子の「渾沌」というのは、湯川秀樹も大好きな物語だったわけです。「儻（しゅく）と忽（こつ）というのは素粒子だ」と言って「素粒子がぶつかるんだ」という話をそこから湯川秀樹は持ってきたので、私は衝撃を受けたことがあるんです。

今の石井先生のご発表は、価値というのを素朴な仕方ではもちろん立てざるを得ないし、立てるんですけども、いったんそれを脱構築して、価値をもう一回問い直していくということだろうと思います。そして、その問い直す場所としての大学のあり方、それを問題にされたのだと思います。

## 総合討論

**中島** それでは総合討論に入りたいと思います。こういうふうにさせていただきます。今、4名の先生方からそれぞれご発表がございました。それで、順番を逆にして、石井先生のほうからご自身の発表を含めても構いませんけれども、他の先生方に対するコメント、質問というのをさせていただいて、それを今度受けて、柳先生、野原先生、田辺先生というふうに進んでいって、多分そこで円環は閉じないと思いますので、もう一回戻るようにしたいと思います。五神先生にも、ぜひ加わっていただこうと思います。じゃあ、石井先生からよろしくお願いします。

**石井** ありがとうございます。ではまず田辺先生に、大変シンプルな用語に関する質問をさせていただきます。最後のところで出てきた重要なキーワード、人間の潜在的可能性というのは、一体どのようなものなのでしょうか。アマルティア・センのケイパビリティにも似ていると感じましたが、それよりも広いスコープを持っているものだと思いますので、具体的にもう少しお話しただければありがたいです。

野原先生は、情報が一元化されて管理される今日の状況において、相互信頼をいかに回復するのかという問題提起をしてくださいました。しかし、欲望の無限な肯定によって現在の資本主義がここまで来て、今日のデータの価値化という現状においてさえ、なお多くの人たちが欲望が満たされていると思うのであれば、そもそも相互信頼を回復していくような欲望は生まれてくるのだろうかという懐疑が時折わたしの中で頭をもたげることがあります。その辺について、何かご示唆をいただければと思います。

最後の柳先生のお話ですけれども、大変魅力的だと思います。質問はとてもシンプルで、では輪廻や輪廻に代わる物語をいかにして物語っていくのかです。それはかなり具体的な実践の問題としてですけれども、とりわけ、大学という場に私たちはいるわけで、大学が物語を紡いでいくために何らかの機能を果たせるのかどうか、果たせるとしたらどのようにそうなのか、それについて何か柳先生のお考えがあればお聞かせいただきたいと思います。

中島 柳先生、お願いいたします。

柳 ありがとうございます。中島先生からいただいた「物語は探究である」というコメント、また石井先生からいただいた「物語をどう物語っていくのか」という問題、いずれも興味深く拝聴しました。問題にお答えする前に、ひとつ想起したいことがございます。それは今年の4月1日に開催されたEAA キックオフトーク「価値と価値化を問う」において王欽先生が提示された二つの位相「価値を信じる」と「価値を生きる」です。この二つの位相は私にとって大変興味深いもので、その後時々思い起こしており、今回の発表を考えるにいたった伏線にもなっております。

この二つの位相は仏教の側から見た時、いまだ迷えし者と既に悟りし者の境界に相当するのではないかと思います。さきほど四聖諦は聖人にとっての四つの「事実」だと申しましたが、この「事実」は悟って始めてそうだと認識ないし実感できるものであり、いまだ聖人ならざる凡夫にとっては欲望などに目がくらみ、そのような「事実」を「事実」として受けとることができません。そのような状態で、まずはそれが「事実」であるという仏の言葉を信じ、仏の指示にしたがい修行することで、仏教的な価値観・世界観を内面化していき、いずれ仏と同じように「事実」を正しく認識できるようになる。「事実」を信じていた」段階から「事実」を生きる」段階へと移行できるわけです。

ここで私が思うのは、「物語」に自ら積極的に参入せず、外部から客観的に叙述するだけでは、周囲の人々を巻き込んでいけないのではないかということです。「物語」を信じ、そこに積極的にコミットしていくことで、やがて「物語」を生きるようになる——「物語」を我が身に引き受け、そのなかで真摯に生きることができたからこそ、仏教は2500年の長きにわたり多くの人々を魅了し、今日まで存続しえたのではないかと思います。

ですので「物語をどう物語っていくのか」という問題に対して私としては、外から聞いたものであれ、自分で考えたものであれ、自分の人生を賭けるに足ると確信できた「物語」の世界に自分を投げ入れ、そこで主体的に生きていくことが、望ましい物語り方であるとお答えしたいと思います。そしてこれは、自分にとっては新たな価値を実現し、他者に対しては彼らを巻き込み世界を変革していくような「探究」になるのだらうと思います。

諸先生に対する私の質問は以下の通りです。

五神先生には、サンガ同様ひとつの共同体である大学において、その構成員である教員・学生のなかで理念をどのように長期にわたり共有していけるのか、お尋ねしたいと思います。

田辺先生にお伺いしたいのは、法や正義を語るうえで必須の基盤となる真理の探究について、それをどのように建設的に議論していけるのかという問題です。歴史を振り返りますと、宗教や社会によって真理の理解は様々であり、仏教の中でもその解釈をめぐり様々な立場に分かれてきました。単なる物別れに終わらない議論を成立させるためには、どのようにすべきなのでしょうか。

野原先生への質問は、石井先生と重なるところがございますが、欲望についてお尋ねしたいと思います。欲望の追求を無限に肯定する資本主義が起動し時間が経った結果、資源の枯渇や貧富の格差など様々な問題が噴出してあります。とはいえ、欲望を否定する仏教のような世界に戻ることは現実的には難しいだろうと思います。資本主義の枠組みで欲望を制御していく道にどのようなものがあり得るのか、ご教示いただきたく存じます。

**中島** ありがとうございます。じゃあ、野原先生、いかがでしょうか。

**野原** いろいろとご質問をありがとうございます。まず、石井先生のご質問に関してですが、要するに資本主義社会で欲望を無限に追求するのが肯定されるなかでの、相互の信頼というのは、それはもうちょっと具体的には、資本主義社会の場合は法律です。

その法律の前提にある発想というのがあります。それは正義を守る、他人を侵害しないというようなルールがあって、それを守るわけです。そういうルールというのは、非常に、本来は強いルールなんですけれども、ただ、それが、何かコンプライアンスというような形で非常に形骸化してきてしまって、形式的なルールさえ守れば何をしてもいいという発想が広がってしまっていて、だから形骸化してしまうということも起きているというのが今日じゃないかと思います。

情報に関して言いますと、情報の一方的な集積というものがあって、それは企業とか国家による集積です。そこでは個人が、別に自分では満足を追



したり、したいことをしているだけなんですけれども、それが知らず知らず管理されてしまいます。そういった形で、欲望というか、快樂の追求と、自分がコントロールされているということが、非常にかぶってしまうという残念な状況が現在起きつつあるというふうに思いますので、それに関しては、まずはいろいろ議論を通じて、そういった、自分が一体どういった情報をそこに発出してしまっているのか、あるいは企業や国家は一体どういった情報を持っているのか、そういったことは、今はあまり公になっていない部分が多いと思います。そういったことを公にしながらか議論していくことが一つの、それを考え直すきっかけにはなるんじゃないかと思います。

そして、もう一つの柳先生のご質問に関してですが、資本主義と仏教というのは難しいと思うんですけれども、ただ、資本主義の中でも恐らく仏教の変容というのがあったと思います。それは19世紀後半以降、特に日本のなかでは近代仏教という形で、何とか折り合いを付けようとしたと思うんです。私はその専門ではないので全然分からないんですけれども、そういった中でも、清沢満之とか、いろんなヒントがあるはずだと思うんです。それが日本も近代化して百数十年もたっていますので、完全に資本主義に背を向けるのではなく、かといって欲望を無限に追求するのでもないような、そういった生き方のヒントというのを近代の仏教者も絶対考えているんじゃないかなと思いますので、そこら辺にヒントがあるんじゃないかと個人的には思います。

五神先生への質問ですけれども、私が先ほど質問しました点以外では、データに関連します。よい社会に向けて、データをどう共有するかということは、非常に重要だと思うんです。おっしゃったように企業はデータを所有しているということが競争力の源泉なのでなかなか難しいと。コンソーシアムというようなこともおっしゃいました。

例えば、ある程度、現代でもいろいろ、EUとかアメリカなんかでも、法律という形でデータの一方的な企業の収集に何らかの形で歯止めをかける、あるいは企業の情報収集を透明化する。つまり、どういった種類の情報を収集しているのかということを見えるようにする。そういった議論も行われているわけですが、そういった法という手段を用いて情報の収集に歯止めをかけるというような方向についてはどう思われるでしょうかということです。

田辺先生のご発表について言いますと、価値ということが、文化人類学と

どうか、人類学的な視点から見て、西洋ではない価値、西洋世界とそうではない社会の価値の在り方が違うんじゃないかと思う一方で、西洋的な消費の市場メカニズムというものによって、相当、非西洋世界も変容してしまいました。それで、市場にのみ込まれたということもあるわけで、そういったことについてはどう思われているのかなということですよ。

柳先生のご発表に関しては、近代日本の仏教者というのは、いろんな人がいると思うんですけども、そういった資本主義の欲望という面に対してどう考えていたんだろうかというふうに、一つでも例を少しお示しいただければなと思います。

石井先生については、老荘思想と荘子ということですけども、私には全然知識がないのですけれども、老荘思想的なものが、結局近代に入ってからよみがえったということなののでしょうか。老荘思想的なものが近代に入って、非常に変わったということなののでしょうか。それとも、元の形を非常にとどめているのでしょうかという質問です。

**石井** 章炳麟に関して言うと、近代に入ってからよみがえった、しかも、仏教のとりわけ唯識論を媒介にすることを通じてよみがえったということができると思います。また、山田慶児氏に関しては科学史的な知見から出発していますので、先ほど中島先生も湯川秀樹の物理学に与えた老荘思想のインパクトについて言及がありましたけれど、興味深いことに、20世紀の科学的知見と『荘子』に描かれる世界イメージに奇妙な近しさがあったということかと思います。章炳麟にしても、仏教をある種の科学的思考であると考えていたようですから、なぜ近代に入ってからよみがえってきたのかと考えてみるとなかなかおもしろいものがあると思います。

**中島** ありがとうございます。じゃあ、田辺先生、お願いします。

**田辺** ありがとうございます。簡単にご質問にお答えしたいと思います。人間の潜在的可能性（キャパシティ）というのが、センの言うケイパビリティ（潜在能力）とどう違うのかですね。センのケイパビリティは、自分が生きるための機会をちゃんと与えられるということですけども、ここで私が言っているのは、人間が自分の生き方を創造する可能性ということですよ。こ

れが一番大事なことだと思います。単に、今与えられた制度の中でしたいことをできるというだけではなくて、どのような新しい未来を考えられるのかということです。現在の経験に基づきながら新しい未来を想像し、そしてつくっていくということこそが、やはり人間の潜在的可能性として一番素晴らしいことですし、それを使って私たちは歴史をつくってきたということが重要であると思っています。

2番目、真理の探求は根本であるけれども、どうやって建設的に議論していくのかですね。これについては、もちろん重要なのは普遍性と論理に基づいた議論であることというのが、まず言葉の次元ではあります。ただし、それだけでは私は足りないと思っております。ただ単にそうした言葉における論理性、普遍性ということだけで真理は到達できるものではなく、まさに柳先生がおっしゃったように、サンガの中で共に生きながら物語を自分のものにする、そしてさらには新たな物語を共につくりあげていくということが必要です。それは触発し、触発される関係の中で自分自身を変えていく、そして関係性のあり方自体を変えていくというふうな、より大きな、言語の論理性・普遍性というものを超えた自己変容そして世界変容という段階であると思います。

そして、大学というコミュニティも、単に言葉の次元で議論を交わすのでは足りません。それこそ、こうした Zoom でも絵があるから結構コミュニケーションできるわけですが、やっぱり一緒の場で空気を共有しながら触発し、触発されるということ、心も体も一緒に変わっていくということが重要です。それには、対話という形で相対するだけではなくて、一緒に何かをしていく、一緒に何かを経験するという、一緒に何かをつくったり、一緒に何かを鑑賞したりして、それについて話をする、そういうふうな経験が非常に重要なんじゃないかなと私は考えています。

それから、3番目、東洋も、西洋的な市場価値によってのみ込まれていったのではないかということですね。私は決して西洋を東洋の価値で批判したいということなんかは考えていないんです。むしろ申し上げたいのは、世界というのは常にグローバルなものとしてあったということです。もう、人類の歴史というのはほぼ常にグローバルな思想交流の中でありましたし、経済的にも交流がありました。もちろん、ただ、この200~300年の間では西洋的な技術や制度というものがドミナントなものになったということはいま

すけれども、それはほんの 200~300 年のお話です。

私がずっと考えていたのは、人類全体にとって、何を価値として、それをどうやってつくっていくのかということなんです。もう既に資本主義の中には、東アジア、東南アジア、そして今は南アジアが入って行って、そのメンバーになっているわけなんです。他の地域が資本主義に入っていくなかで、この資本主義というものがどこまでどのように変えられていったのか、これについてはきちんと経済史の中で検証していかなくてはなりません。東アジア的あるいは南アジア的な価値や技術や制度というものが、ある程度資本主義に影響を与えていったということは確実にあります。

こうした内側から変わっていく可能性ということを考えることが重要です。重要なのは、市場を否定したり、資本主義を否定したりするとかいうことではなくて、市場の内側、それから技術の内側から変わっていくということでしょう。私たちが、今持っている技術の在り方、たとえば五神先生がおっしゃったようなデジタル・トランスフォーメーションというものが、非常に大きな可能性を持っていることは確実なわけですね。ですから、私たち人間が、機械そして自然とつながる中で、より素晴らしい世界をどうやってつくっていけるのかということ、その内側から考えなくてはいけないと思っています。外側から、これは西洋のものだから駄目ですというふうな批判は、私は決してしたくないと考えています。

答えばかり長くなっちゃいましたけれども、質問をいたします。まず石井先生には、齊物的平等についてお聞きしたいです。これについては、以前にもいっぱいお聞きして、すごく面白いなと思ったんです。これは、やっぱり南アジア、インドの考え方とも非常に似ています。私も存在論的平等ということをおっしゃって、存在の平等に立脚した多様性の肯定こそがインドの出した普遍的思想であり、それが東アジアにも非常に大きな、重要な影響を与えたということは申し上げてきました。その思想が、中国的な伝統と結びついて、非常に普遍的でありながら、中国的な形で現れたというのは非常に感銘を受けました。

ここでおもしろいのは、カオスという言葉です。原初状態が何で渾沌なのか、まだちょっと分からないところがあるんです。インド的に考えると、世界の原初状態はシャクティそのものです。シャクティは力です。ただ原初の力というのは、渾沌ではないんです。原初の力であるシャクティは、シ

ヴァという絶対原理と不二なんです。この辺りはちょっと中国的な考え方と違うのかなと思うのですが、その辺りを少しお聞きできればと思います。これは原初状態をどう考えるかという問題です。

柳先生のお話で、物語を自分のものとして生きることというのは、非常に魅力的だと思いました。そして、そのためのサンガの意義や重要性ということについて、改めてお聞きしたいと思います。ご自身がお質問されたなかにもありましたが、私もサンガというインフラは非常に重要だと思っています。柳先生は、その一番重要な意味とは何だと思っていられるかということをお聞きしたいです。恐らくそれは、物質的なものだけではないと思うのですが、では何かということについて、一つお伺いできればと思います。

もうひとつ、野原先生への質問です。情報は共有できる、だから共有できる満足があるとおっしゃるんですが、それはそのとおりだろうと思います。ただ、どういう情報をどうやって共有するかということが非常に重要だと思うんです。これは媒体の問題と関わります。情報というのは必ず物質的基盤が必要です。つまり媒体が必要です。そして、その媒体や表象が、アートとつながります。情報を情報として共有するだけでなく、体と心を動かす、感動させるような形での情報の共有というものがなければ、やはり公共的な価値の共有というのはできないんじゃないでしょうか。今は、情報というのは差異であるということで、データにのみ着目するかたちで議論されているところがあると思うんですが、その具体的な物質性、それがどのようなかたちをもって現れて、いかにわれわれの心身に影響を与えるかということまで考えなくちゃいけないんじゃないでしょうかということです。以上です。

柳 いただいた質問にたいする回答を申し上げます。

まず野原先生からいただいた「資本主義の中でも起きたであろう仏教の変容」についてです。挙げていただいた清沢満之について私も詳しくは存じ上げないのですが、28歳の時に妻子を故郷に帰し剃髪して僧衣をまとい、やがて塩もとらず煮炊きも放棄する厳しい禁欲生活に入っています。彼によればこれは「Minimum Possible」、生命維持を可能たらしめる最低限の生活を追求するもので、その弊害が顕現した当時の資本主義に対抗するものだったそうです。新たな時代の当来を前にして、仏教の原点に回帰しようとした例

と言えるでしょう。

経済に対する仏教側の立場については、釈尊の言葉が参考になるかもしれませんが。釈尊は出家者に対しては最小限の私有財産しか認めず、欲から離れさせましたが、在家者に対しては、正当な職に従事して正当な収入を得て、家庭を維持し善行を為すよう説いています。その教えは大変具体的なもので、収入を四分割して25%ずつ家計・事業・貯蓄・投資に充てるよう進めています（『中阿含経』巻33「善生経」）。このように説く仏の意はどこにあるかと申しますと、この家計への懇切丁寧なアドバイスは次第説法（聴き手の機根にあわせ浅から深へと進む説法）の一環となっており、生活を安定させたうえで善行を行なうこと、善行により死後に良い生まれが得られること、しかし輪廻の世界に留まるかぎり苦から逃れ得ないこと、抜本的な解決のためには出家し欲望を断つべきことなどが一連の流れとして説かれるわけです。つまりここでも輪廻が前提となっており、これを踏まえるのであれば「輪廻という世界のなかで善行を行なうため正しく稼ぎ運用せよ」というのが、仏教的な経済観になるのだと思います。

つづきまして田辺先生の「サンガというインフラの意義について、単なる物質的なものでない重要なものは何か」というお尋ねにお答えしたいと思います。サンガの意義について律（僧侶の規範）を研究している佐々木閑先生は『「律」に学ぶ生き方の智慧』という本のなかで、集団で暮らすことに奥深い宗教的な意味があるわけではなく、修行生活の効率化こそがサンガ制定の唯一の理由であると述べておられます（新潮社、2011年、29頁）。実は今回、「コモンズ」という言葉から「サンガ」を想起したのは、この本を読んでいたからで、今回の発表にあたっても参照いたしました。専門家の佐々木先生がこう仰ることに鑑みますと、サンガの運営方法を規定した律からはその精神的・宗教的な意義は読み取れないのかもしれませんが。また私は「論語読みの論語知らず」ならぬ「仏典読みの仏教知らず」で、文献を読むだけで出家者としての修行経験がないので、残念ながら自分の経験から申し上げられることもございません。

しかしながら、先生の質問をお聞きして思い出した本があります。それが、チベット仏教のサンガのありようを魅力的に活写した石濱裕美子先生のご著書『ダライ・ラマと転生』（扶桑社、2016年）で、わたしはこれを読んで、輪廻の世界を生きる出家者たちの真摯な生き様に圧倒されました。

この本はあるチベット仏教の僧院に留学したひとりの日本人と、ダライラマの命により彼の指導にあたったチベット僧との交流が主軸になっているのですが、その日本人がお腹を壊すと、チベット僧は「叔父もお腹が弱くて、最期はお腹を壊して死んだ。お前も気をつけなさい」と言い、日本人が密教のある儀礼を熱心に学ぶと、叔父もそうであり「お前とそっくりだ」と言ったそうです。その叔父は、チベットに進駐した中国の軍隊と庖丁一本で戦おうとする僧をなだめ、その道中で僧を励ましながらか、時には我が身を呈して僧を守り、ともにインドに亡命した人物で、その僧にとって命の恩人なのでした。またある時、その僧はチベットの僧院の絵を見せ、「お前は昔、ここに住んでいたんだ。思い出さないか。私たちはここに住んでいたんだ」と懐かしそうに語り、またある時には「私はお前から授かった法を、返しているだけだ」と告げたそうです。この時、チベット僧は日本人が叔父の生まれ変わりだと確信し、前世から続く関係を生きていたのです。

またこの僧は死に臨んで、ダライ・ラマから「私とお前の縁は今生限りのものではない。来世にも深い縁をもって巡り合うだろう。『覚りへの道』を読んで死に備えて心を調えなさい」と言われ、その僧は弟子に「私は来世もまた人として生まれる確信がある。自分の生まれ変わりが、多くの人のためになると思えば、僧として育てなさい」と告げ、出家者の誇りである袈裟をまとい眠るように亡くなったそうです。

このようなエピソードは、サンガの有する宗教的・精神的な意義を示してくれるように思います。集団で生活し、物語を共有し生きることで、その物語はひとりで探究するよりもずっと強度の高いリアリティをもって個々人に内面化され、互いに響き合って確固たる世界・価値を構成していくのではないかと思います。これは個人的なことですが、自分は仏教の勉強を始めた時に、この「輪廻」という考え方がいかにも非科学的な迷信に思え、そのようなものが仏教のなかにあることを残念に思ったのですが、その後このようなエピソードや仏典での語られように触れるうちに、単なる虚構として片づけるわけにはいかない物語の重要性に思いを致すようになりました。そのような興味関心から、今回の発表でも輪廻に焦点を当てた次第です。

最後に私からも石井先生にお尋ねしたいことがございます。本日お聞きした齊物の話は、田辺先生も先ほど仰っていたように、インドおよび仏教の考え方にとても近いように感じ、たいへん興味深く拝聴しました。言葉・文

字・名称・心の作用の全てを離れたところで、「万物が不斉であるが故に斉である」という世界が開けてくるというお話は、言葉・分別を離れたところで空という真理にいたる仏教の中観派の考えに通じるように感じたのですが、その一方で仏教とは異なる荘子の斉物の特徴とは何なのだろうかと思った次第です。仏教では全ては空（不変の本質を欠く）から全てはその点で同じだ、などと説きますが、言葉を離れたところで不斉が斉となる荘子のロジックについて、もう少し詳しくご教示いただければ幸いです。

**石井** 章炳麟は国粹主義を通じてインドの知識人にもシンパシーを感じていたこともありますし、何より仏教への関心が強かったので、インドの思想文化への興味はたいへん強かったようです。しかし、彼は輪廻思想について、インドでは有効であるが中国では無意味化されるのだと嘆いてもいます。彼の主張によると、輪廻からの解脱が目指されるのは現世が苦しみに満ちたものであることが前提となるはずですが、現世的な享楽を重んじる中国文化の伝統では、輪廻をむしろ喜ぶばかりになってしまうと言うのです。「斉物論」の最後は、荘子が胡蝶になった夢から醒めて、「いったい自分が蝶になった夢を見たのか、それとも蝶が自分になった夢を見ているのだろうか」と悩む、かの有名な「胡蝶の夢」の物語ですが、この「物化」の物語を章炳麟は輪廻の物語に引きつけようとしてこう言っているわけです。『莊子』は仏教伝来より前のテキストですので、そこに輪廻の観念は見られないとするのが一般的な解釈ですが、章炳麟は敢えてそこに挑もうとして嘆いています。先ほどの「いかに語るか」という柳先生への質問はそのようなことを念頭において提起したものでした。

渾沌（混沌）と力との関係ですが、田辺先生がご指摘のように、混沌を原初のすがたであると言い切る山田慶児氏のモデルに、わたしは若干の違和感を抱いています。それは『莊子』の思想とは相容れないように思われます。むしろ、この三極構造論を活かすならば、「斉物論」に出てくる「是非の辨」とそれに付随する「道枢」、「環中」という概念をカオスの場であると考えたほうがよさそうだとわたしは思っています。荘子は、儒家と墨家の論争をどちらが正しいとも言えない相対的な議論であるとみなしています。こちらから見れば自分が正しく（「是」である）、あちらが非であると見えるが、立場を変えれば、こちらもまた「非」に見えるもので、まるで「朝三暮四」のよ



うに、結局は違いはないのに、立場に縛られて互いにどちらが正しいのか、決着のつかない論争をしている。それは回転扉の軸のようなものを中心にしてぐるぐると永遠に回り続けるものであると述べて、是非の終わりなき論争は、「道枢」とか「環中」と呼ばれる中空をめぐる無限の円環を回り続けると言うのです。渾沌とは、言語による分節化以前の状態ですので、カオスの場が成立するとすれば、この「道枢」や「環中」という、力の中空においてではないかというのがわたしの報告の意図でした。したがって、大学が価値の脱構築の場として機能するとしたら、それはさまざまな作用の合力によって力の中空が生み出されることによってではないかと思います。

この「是非の辨」について、3世紀の郭象という人はすべての物が自ずから正しいとしている意味では是も非もないのだと解釈して、章炳麟もそれに従っています。そうすると、こちらとあちらのちがいは相対的なちがいに過ぎないことになり、章炳麟はそれを「空」と言います。「空」というのは唐代に成玄英が『莊子』のこの箇所注に注釈を加えた際に使ったことで、成玄英が中観派を含む仏教の影響を大きく受けていたことは知られています。章炳麟に限らず『莊子』を読む際に仏教からの知見を排除するのはこういう解釈史に依拠する以上不可能だろうと思います。ただわたしにとって難しいのは「空」であることと「不斉にして斉」という平等観とはまだストレートに結びつかないように思われることです。

**中島** ありがとうございます。実はもう時間になってしまったんですが、では、五神先生、ひと言、おっしゃっていただけますでしょうか。

**五神** 今日は集中講義を受けたような感じで、先生方のご議論も興味深くお聞きしました。まず、私自身、総長をやりながら、いろいろ先生方の研究の話はかなり深くお聞きしたいなと思っていました。最初は、先ほども言いましたように、入学式や卒業式のときに、学問のわくわくする楽しみのようなものを、学問の入口に立ったばかりの人たちにどう伝えるかというときに、この大学の中にどんなわくわく感があるのだろうかというのを、私自身の好奇心として知りたかったということがあります。

今日の議論では、価値ということが、簡単な言葉で言えるようなものではないということが一つの結論でもありますが、しかし求めなければいけない

もののレベルの高さや深さについて、一般に言われていることと違うものを、東大としてきちんと伝え、広めていかなければいけないということが共有されたかと思います。

その観点で、総長をやっていて一番楽しかったことは、どの分野の話の聞いても、深く話を当事者から聞くと、やはりわくわくするということです。例えば、明治時代に日本の法制度の整備に大きく貢献した梅謙次郎先生の話など、私の専門とはまったく違う分野の話ですが、そういう話でも、詳しい話を聞くとやはりわくわくするのです。

今日の議論をまだ、きちんと私が理解できたかどうか分かりませんが、田辺先生のおっしゃる、人間の潜在的可能性ということは、自分の生き方を自ら創造することが人間の本質なのだろうと思います。自ら創造するということは、結局、人は一人ひとり別々ですから、多様性につながります。その多様性を尊重し合って、大事にしていく。その中から高みを目指していく。そうやって高みを目指すときには一緒にコラボレーションすることが楽しいと感じるので、そういう場をどうつくっていくかが重要です。そういうものを阻害しないような形で、逆に言えば、そういう活動に向かっている人たちをエンカレッジするような場を大学にどうつくっていくのが極めて重要だと思いました。

柳先生のおっしゃった、こういった理念をどう共有するかに関して、私は、まず、私たち教員が学問は本当に楽しいんだということを、わくわくしている姿を仲間にも学生にも見せること。それが一番、私たちが伝えるべきこと、伝える基本だろうと思っています。そういうことをやっている人たちが、リスペクトし合っているという姿を見せることがまず重要です。

野原先生がおっしゃったデータを共有するということは非常に重要です。経済学的に見ると、デジタル化されてしまうと完璧な複製ができるので、価値を失ってしまうような議論もありました。データというのは、いろいろなところに存在してはいますが、それが直ちに使えるかという、必ずしもそうでない場合が多いのです。ですから、データを使えるような状況で共有することが非常に重要です。きちんと共有するためには、管理も必要になりますし、共有すべきデータをきちんと信頼、トラストを支えるようなものを提供しながらつくっていくことも必要です。そういう場として、大学は中心的役割を担うべきだと思います。

例えば、企業が本来共有すべきものを独占していたり、あるいは本来取得してはいけない個人情報をごっそり取得していたりするような状況になったときに、どう管理するのは極めて重要な問題です。法律によってどこまで規制できるのかということになります。ここ10~20年ぐらいの、デジタルトランスフォーメーションが非常に加速している中で、ハードロー的な意味での管理だけではできなくて、ソフトロー的な形でマネジメントしていくという考え方が極めて重要だろうと思っています。

ただ、日本はご承知のように、ものすごくハードロー的な考え方が強い国です。日本が法制度の多くを手本としたドイツは、日本よりフレキシブルに法律を動かしているようにも思います。そういう意味で、日本において法によるルールをどう運用していくかについての創造的な知恵が必要ではないかと思っています。これは法学部の先生から見ると、私が思うほど簡単な問題ではないのだらうと思いますが、価値というものをきちんと追求していくための知恵として考えなければいけないかなと思います。

最後に、柳先生がおっしゃったことでしょうか。情報の共有のときに、まず情報自身のトラストが大事だということは申し上げましたが、それに加えてアートに象徴されるような、感情に直接関わるような形での共感が大事ではないかと思っています。

つい最近、先ほどのプレゼンでも示したように、藝大とのコラボレーションの話があって、日比野克彦さんとゆっくり話をしたときに、論理や普遍性というものとは違った感動があって、それは人によって若干違うので、一律ではないにしても、そういうものを追求することが必要という議論になりました。それが東京大学の中に備わっていないわけではないですけども、システムとしては非常に弱くなっていると思います。

最近、この6年間でそこを補おうという活動が、総合文化研究科や先端科学技術研究センター、生産技術研究所など、いろいろなところで出てきているのはよいことだと思っています。そういうものが人間の価値を際立たせるということですから、東大としては補強していかなければいけないことではないかと思っています。これには、大きな可能性を感じているところです。子どもの頃の体験というのは普遍性や論理では語られないものですが、人生全体を支えている部分がありますよね。ですから、そこに大事なところがあることは確かであって、そういうものを阻害しないような、多様な思い

のようなものを阻害しないようなマネジメントをどうしたらいいだろうかということ私はずっと考えています。

外からは、かなり強烈な一律化の管理が求められているのは確かであって、私はそれに対して激しく抵抗し、いろいろなことをやって見せたことによって、相手も認めてくれるようになったという状況があります。こうした流れに押し戻されないように注意しないといけないので、今日のような議論をきちんと広く伝えていくことが極めて重要だと思います。

東大が一人勝ちして資源を集中するために改革をしたと思われるのは、私は非常に不本意です。私は、他の大学に比べてよくなるということ考えたことは一度もありませんでした。しかし、全体として、知的な活動がもっとリスクとされる社会にしなければいけなくて、そのために東大は何をしないといけないかということはずっと考え、そのために行動してきたわけです。その趣旨を伝えるという意味でも、今日のような議論をもう少しきちんと発信できると、よりよくなるのかなと思います。

甚だ不十分な状態で任を終えてしまったので、ぜひ先生たちと一緒にそこは強化していきたいなと思いました。ありがとうございます。質問に十分答えられたかどうか分かりませんが、それをやっているのと長くなり過ぎますのでここで終わりたいと思います。ありがとうございます。

**中島** ありがとうございます。本当に司会の不手際で時間が押してしましまして、大変申し訳ございません。

本日は五神前総長をお招きしまして、非常に充実した議論ができたかと思います。いま一度、ご登壇の先生方に感謝申し上げます。本日は本当にありがとうございます。

**五神** どうもありがとうございます。私も大変楽しませていただきました。ありがとうございます。

**中島** 参加者の皆さんも本当にありがとうございます。

### 【基調講演】

**五神 真** (GONOKAMI, Makoto)

国立研究開発法人理化学研究所理事長。東京大学大学院理学系研究科教授・第30代東京大学総長。研究分野は光量子物理学。著書に『変革を駆動する大学——社会との連携から協創へ』（東京大学出版会、2017年）、『大学の未来地図——「知識集約型社会」を創る』（ちくま新書、2019年）、『新しい経営体としての東京大学（東京大学出版会、2021年）』（*University, A Driver of Social Change: My Six Years as President*, Tokyo: University of Tokyo Press, 2021）。共著に『先端光科学入門』（強光子場科学研究懇談会、2010年）、*Terahertz Spectroscopy and Imaging* (Springer Series in Optical Sciences), K. Peiponen, A. Zeidler, M. Kuwata-Gonokami (Eds.) (London: Springer, 2012)。

主な論文に“Magneto-optical trapping and cooling of strontium atoms down to the photon recoil temperature” H. Katori, T. Ido, Y. Isoya, and M. Kuwata-Gonokami, *Phys. Rev. Lett.* 82, (6) 1116–1119 (1999), “Giant Optical Activity in Quasi-Two-Dimensional Planar Nanostructures” M. Kuwata-Gonokami, N. Saito, Y. Ino, M. Kauranen, K. Jefimovs, T. Vallius, J. Turunen, and Y. Svirko, *Phys. Rev. Lett.* 95 (22), 227401/1-4 (2005), “Observation of Bose-Einstein condensates of excitons in a bulk semiconductor” Yusuke Morita, Kosuke Yoshioka and Makoto Kuwata-Gonokami, *Nature Communications* 3 (1) 5388/1-9 (2022) など。

### 【司会】

**中島隆博** (NAKAJIMA, Takahiro)

東京大学東洋文化研究所教授・同大東アジア藝文書院院長。研究分野は中国哲学、世界哲学。著書に、『残響の中国哲学——言語と政治』（東京大学出版会、2007年。増補新装版、2022年）、『莊子——鶏となって時を告げよ』（岩波書店、2009年）、『共生のプラクシス——国家と宗教』（東京大学出版会、

2011年。増補新装版、2022年）、『悪の哲学——中国哲学の想像力』（筑摩選書、2012年）、『思想としての言語』（岩波現代全書、2017年）、『危機の時代の哲学——想像力のディスクール』（東京大学出版会、2021年）、『荘子の哲学』（講談社学芸文庫、2022年）、『中国哲学史——諸子百家から朱子学、現代の新儒家まで』（中公新書、2022年）、共著に『日本を解き放つ』（東京大学出版会、2019年）、『世界哲学史』（全8巻＋別巻、ちくま新書、2020年）、『全体主義の克服』（集英社、2020年）など。

### 【登壇者（五十音順）】

**石井 剛** (ISHII, Tsuyoshi)

東京大学大学院総合文化研究科教授・東アジア藝文書院副院長。研究分野は中国哲学。著書に『戴震と中国近代哲学——漢学から哲学へ』（知泉書館、2014年）、『齊物的哲学』（華東師範大学出版社年、2016年）、編著に『ことばを紡ぐための哲学——東大駒場・現代思想講義』（白水社、2019年）、共著に『世界哲学史6——近代I 啓蒙と人間感情論』（伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留編集、ちくま新書、2020年）など。

**田辺明生** (TANABE, Akio)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任教授。研究分野は人類学/南アジア地域研究。著書に『カーストと平等性——インド社会の歴史人類学』（東京大学出版会、2010年）、共編著に『南アジア社会を学ぶ人のために』（世界思想社、2010年）、『歴史のなかの熱帯生存圏——温帯パラダイムを超えて』（京都大学学術出版会、2012年）、*Democratic Transformation and the Vernacular Public Arena in India* (London: Routledge, 2014)、*Human and International Security in India* (London: Routledge, 2015) など。

**野原慎司** (NOHARA, Shinji)

東京大学大学院経済学研究科准教授。研究分野は経済学史・社会思想史。著書に『アダム・スミスの近代性の根源——市場はなぜ見出されたのか』（京都大学学術出版会、2013年）、*Commerce and strangers in Adam Smith* (Berlin: Springer, 2018)、『戦後経済学史の群像——日本資本主義はいかに捉えられたか』（白水社、2020年）、共著に『経済学史——経済理論誕生の経緯をたどる』（日本評論社、2019年）など。

柳 幹康 (YANAGI, Mikiyasu)

東京大学東洋文化研究所准教授。研究分野は中国仏教思想史。著書に『永明延寿と『宗鏡録』の研究——一心による中国仏教の再編』(法藏館、2015年)、共著に『最澄・空海将来「三教不斉論」の研究』(国書刊行会、2016年)、『一心方法——延寿学研究』(宗教文化出版社、2018年)、共訳に『新国訳大蔵経』([中国撰述部]第6冊 [禪宗部] 1-6 法眼録・無門関、大蔵出版、2019年)など。

## 編集者

崎濱紗奈（EAA 特任助教）

EAA Booklet 25

EAA Forum 16

「人間」を価値化する

[2021年8月5日]

著者 五神真 田辺明生 野原慎司

柳幹康 石井剛 中島隆博

発行日 2023年3月10日

発行者 東京大学東アジア藝文書院

製作協力 一般財団法人東京大学出版会

デザイン 株式会社 designfolio / 佐々木由美

印刷・製本 株式会社真興社

© 2022 East Asian Academy for New Liberal Arts,  
the University of Tokyo





# EAA Booklet - 25

EAA Forum 16

座談会•5 「人間」を価値化する

